



TITLE:

# 明治維新政治史序説( Dissertation\_全文)

AUTHOR(S):

池田, 敬正

---

CITATION:

池田, 敬正. 明治維新政治史序説. 京都大学, 1962, 文学博士

ISSUE DATE:

1962-06-19

URL:

<https://doi.org/10.14989/78267>

RIGHT:

第四章

倒幕運動



第一節 討幕理論の成立

— はじめに —

明治維新におけるものととも重要な課題が、

『倒（あるいは討）幕』にあつたことは、今

さらうまでもないことである。しかしながら

『討幕』という言葉は、従来から使われて

一様には理解されてゐない。たとへば尾佐竹

独は、『倒幕』という言葉によつて表現せらる

る政治運動には、①『幕府より政權を取

つたこと』、②『幕府を廃した』、③『

封建新度の撤廃の三つがあるとしており、

そして具體的には、①は幕府から<sup>は</sup>政權奉還、

朝廷からは王政復古であり、②は幕府からは

征夷大将軍辭退、朝廷からは討幕であり、③

は廢藩置縣であるとしている。ここを窺われ

ることは、『倒幕』に關しては、かなり広

意味をもたせえあり、これにたいして『討幕』

の方は、直接的に武力討幕の意味にのみ解し

ているようにある①

この是を明解に規定したのが井上清である



う。井上は「彼ら（改革派）は尊攘派から倒  
 幕派になり、やのこ『公議政体』の妥協論と  
 もついに袂をわかれ討幕派となり」とのやべ  
 いる。②この美と市河しとのやれば、『倒幕』  
 とは、公議政体論さうには大政奉還論にみう  
 れるいは妥協的な武力を伴ふたの幕藩体  
 制否定の運動をも含むものとして考えられ  
 いたのにたいし、『討幕』は、大政奉還さ  
 のりこえて武力による幕府打倒の方向のみを  
 意味させしめた。しのかここで  
 討幕の  
 意義

は、井上が『倒幕派』と尊攘派から成長して  
くるとしりる兵である。『倒幕』かいまの  
べたように、平和的な幕藩体制を定めた路線で  
あり、『討幕』と対立するところから、  
尊攘運動からこの『討幕』を合意を倒幕運動か  
展開すると主張することは、たとえ藤井匡  
が即の如く見解に通りぬけるであろう。藤井は、  
文久年間の尊攘運動の激化の中に「倒幕の氣  
勢」をみることであり、  
「統一」の倒幕の密計」  
を、慶應年間に入つて「統一」の倒幕の密計」



加計画されたとし、先般見解を中心とする  
 動きと蔭に長同盟を中心とする動きとを指導  
 する。③ ここでは尊攘運動の展開としての武  
 力討幕の方向のミと倒幕運動と理解してゐる  
 のである。ところかこにわたつて井野辺茂  
 雄は、かなり異つてゐた。井野辺は、文久期  
 以降ようやく「王政復古」と現実からい  
 める機運にかがり、此機運に乗じて群衆を  
 指導せる識者の行動に、急進と漸進との二つ  
 があつたとし、王政復古（倒幕運動）に、

急進論とし、の『討幕』と漸進論とし、の『

公武合作』の二つの政治路線が相拮抗してた

たので、大実とあきらかにし、さらに大政奉還

後の『王政復古』に關する二大政治とし、

「薩長二藩を中心とする主戦派」と「土藩と

中心とせる公議政治派」とかあることと主張

し、この

この藩井と井野田との見解の相違は、井野

田の見解が、決して幕府の徳川慶喜公伝に

色濃く現われ、このことから推察されるよう



に、幕府ありいは同明的佐幕藩閥の立場と反  
映させたかあるいはそうではなかつたかといふ  
学問外的な問題がそこにはみられるのである  
り、従つて幕府の見解<sup>如何</sup>より勤王史觀的であ  
るといへるのである。それはともかくといへ、  
文久如北條の幕藩体制克服のための政治運動  
と、一党の線においてみるか、あるいは二党  
の線の相剋においてみるかはそれぞれ重要な  
ことである。この点で右の井上の見解や、あ  
るいは遠山菊樹が「尊攘派から倒幕派へ、」



おしえて判明~~後~~へ、その指導者の三般~~の~~わが可  
能であつた」と其力倒幕の主体についてこの  
る見解も、きわめて暖昧なものがあるといわ  
れる。なるまい。このように戦後のすゝめ~~て~~マ  
ルクス主義的な維新史家の見解が、尊攘史観  
的な幕井の見解に近いといふことは、奇妙な  
暗合であるが、それにはやはり一定の理由が  
ある。すなわちそれは戦後のマルクス主義的  
維新論が、維新の主体を下級武士と庶民の諸  
階層との同盟関係にあるものと強調し、いた

かりである。そのことは『序章』の問題に  
 なるべく、維新の展開と内部矛盾の展開に重  
 なる点において分析したところに原因があつたと  
 いふのはならない。そしてこのことは、幕藩  
 領主層内部における『近代化』の問題を造す  
 評價としてしるす結果をまねいた。それは彼ら  
 の『近代化』が重要だといふのやばさを見て、  
 彼らをして猶且『近代化』を必然ならしめ  
 、『外圧』の過少評價をまねくからであり、さ  
 らには、次にのやばさより維新への『二つの



道』の相剋を無視する。こゝとこよつて、明治政  
權への見通しと變遷をものたりとしまゐるかう  
である。

堀江英一は、「市一新を成立させたのは、  
一般農民層を動員した農村支配者層とくに下  
級武士階級であつた」といふ、こゝにツツサ  
て「だが、成立した市一新は絶対主義天皇新  
は、その下級武士階級を解体し、農村支配者  
層の参加を拒否するものがある」と主張して  
いる。<sup>⑤</sup>この見解は、戦後の維新論者の所より昔

通する見解であるか、全く矛盾した見解では  
 ないか。維新も推進した主体が、維新後  
 の新政権のうちに追いつけられ、という端的に云は  
 革命の主体が革命政権のうちに除外されるという  
 矛盾したことがあつたか。こうした疑問に  
 ついて遠山が答へは、――「倒幕派が進歩的であつたの  
 維新政府が反動的である」と考へることは誤り  
 である」と主張してゐる。⑥。これは「維新政府  
 は倒幕派の政權であつたか」といふ（自らの）誤同にた  
 いする答へとしてゐる。やゝあるか、こ



の遠山の設問は、右の場への見解に内在する  
 矛盾に答えるために、維新政権か倒幕派政権  
 であることへの疑問を提出してゐるのがある。  
 ところが丹羽邦男によると、「倒幕派といふ  
 もの如明治維新をやつたのやほなしに、倒幕  
 派と倒したものの如明治維新——と云ふと、  
 たのやほなしか」と云ふ発言するのである。  
 このよくな遠山や丹羽の見解は、  
 にある矛盾を克服するにために提起されたもの  
 といえるのがあるか、それは倒幕派の役割と

倒く評價するにありつは、その古さを強調する  
ることを通じて實現させようとした。遠  
山は、従来の倒幕派の曲筆として方々~~新~~加集中し  
ていた長州藩尊攘派を、特殊の條件下で促  
進された例外現象として考へ、上士公武合休派  
と妥協的であつた薩摩藩倒幕派とを加へ、倒幕  
派の典型であつたと主張するのがある。但方丹  
村は、古くは倒幕派の一部の豪人、豪農層と  
組織した上に、倒幕派加家臣團の一  
方派であるといふ基本的な性格に異なりはな  
く



一、領土權力の強化を以ていつと強固さ  
 せるものがある。②  
 一、この見解をより総合的に  
 展開したのが大江志乃夫である。大江は、  
 「正義」派武士団——具體的には長州尊攘派  
 ——がその政治的目標において豪農層との同  
 一相違があることと認識したところに、「正  
 義」派武士団が創設派に生長するうと可能  
 になつたと主張し、是しこのように「豪農  
 」と縁を切つたが故に、創設派は妥協の政治  
 論であるが議院政治論を自らの政治論とし、列



議會議論を自らの戰術論とする。ことか可能になつたとのマツのがある<sup>(10)</sup>。要するにこゝした見解は、維新政權か、とりわけ維新運動に夢加し、いゝ富豪農層とその政權のう抑除し、いたる事を、革命的に説明するため維新政權を作りたし、いゝ勢力の階級的性格を古く理解しようとするものかあつた。もし、このことによつて、先述の堀江の見解における矛盾の克服が可能だと考へるものがある。

たかこのようない見解は、先述の堀江にある。

いは奈良本屋也。さらには井上清の見解と異向  
 うのう対立してゐる。それは遠山ら加『例』  
 夢派といふのにたいして、井上ら加『討』幕  
 派と使ふといふ言葉の問題はともかくともして、  
 彼らの維新の立役について理解は、たとえ  
 井上らの「草莽浪士の徒加」の民衆となん  
 かのつなかりをもつてゐる。彼らは勇  
 義と自信をもつて、内乱を起し、討幕を主  
 張し、指導者を動かしたのがある。⑪  
 民衆の表裏的なエネルギヤを高く評價する。



場に見るの北にいた。と云ふ。この開止の見解  
 にも、先づ堀江と同様の矛盾がある。井上は  
 改革派の少尉派に成長する。草莽と云ふ、た  
 とえ「一時的的部分的」で済む、  
 「代表」する存在であるところ、  
 のやうな、出来上つた明治國家を、  
 その官僚の独裁國家と云ふ、  
 封建國家と云ふと評價してゐる。⑫  
 なるは「絶対主義國家政體の」指導層と云ふ  
 変革的なたかき「万民」およびその

代表 ~~も~~ やある ~~草莽~~ 草莽 ~~」~~ の同には、いかなる

相互關係にある ~~」~~ の知らうか。 ~~」~~ 万民 ~~」~~ を代表

する ~~」~~ 草莽 ~~」~~ の ~~」~~ 天皇と官僚の独裁國家 ~~」~~ を

作つた ~~」~~ か ~~」~~ ありうか。 ~~」~~ 同様の矛盾が存在する

のやある。 ~~」~~ それを ~~」~~ 遠山らの見解 ~~」~~ とい

う ~~」~~ ありうか。

し ~~」~~ かし ~~」~~ 草莽 ~~」~~ の ~~」~~ 万民 ~~」~~ を ~~」~~ 代表 ~~」~~ し ~~」~~ え

た ~~」~~ の ~~」~~ 吾 ~~」~~ の ~~」~~ は ~~」~~ と ~~」~~ も ~~」~~ か ~~」~~ く ~~」~~ と ~~」~~ し ~~」~~ て ~~」~~ も、 ~~」~~ 内乱 ~~」~~ を ~~」~~ 恐

れ ~~」~~ ざ ~~」~~ る ~~」~~ 討幕 ~~」~~ の ~~」~~ 主張 ~~」~~ は、 ~~」~~ 遠山 ~~」~~ らの ~~」~~ 見解 ~~」~~ によ

つ ~~」~~ て ~~」~~ は ~~」~~ 到底 ~~」~~ 理解 ~~」~~ できない ~~」~~ 問題 ~~」~~ である ~~」~~ と ~~」~~ 考 ~~」~~ へ ~~」~~ る。



「家臣國の一方派」に對し、  
 手段をとるようなことは、全く不可能なこ  
 とであつたといふのは、また全一の偏  
 幕派が「家臣國の一方派」にしかあつた  
 うは、何故公議政体論がうりこえられな  
 けりなうのか。また大にのいふよ  
 うに、  
 「倒幕派武士團」は豪農と縁を切つた  
 ところから成立したといふことの意味は、  
 別に何を意味するのたうか。豪農といふ  
 社會的主體から統一國家を構想するこ  
 とは、いさ

ないであらう。従つて倒幕運動が、豪農的立場  
 からは理解できないといふのは正しい。だが  
 加えてことは、  
 「倒幕派」が幕藩制的主立場  
 に帰することと意味しない筈であるし、  
 「幕派」が「家臣団」の一方派であることも  
 意味しない筈である。  
 ところがここが注意しなければならぬの  
 は、この大きく二つに分れる見解が、何れの  
 立場に立つにせよ、  
 倒幕運動を一つの路線で  
 説明しようとする立場に立つといふことであ



り、いかに糾弁の尊攘派史観に近い立場にた  
つてゐることである。ところが井野田は、二  
つの路線の拮抗に倒幕運動をみようとして  
た、実はこの立場を新しく展開させることを  
通じて、先ほどの難問解決の緒口をつけた  
と考えられている。先迴つて結論的にい  
うならば、改革派路線が雄藩連合運動とそれ  
に續く公武合作運動<sup>いさ</sup>展開して来たのにたい  
して、それと階級的性質を異にする尊攘派か  
尊攘運動なる改革派と相対抗する路線を展開



いへまたこゝには、前章すべにのべた通りであ  
る。この反幕運動内部における相対立する二  
つの路線が、倒幕運動内部に同様に展開して  
いく。前者が公議改修論を内容とする大政奉  
還運動に展開し、後者の重要な内容やあつた  
草莽崛起論加、武力討幕の方向において新し  
い展開を見せるのであると考へてゐる。まづ  
て前者の場合には、改革の立場を系統的にも思  
想的にも脱却してない方向であつたのだから  
いへ、後者の場合には、幕藩制度の立場は思想

的には脱却しえた方向であると考えられている。  
従つてこの二つの路線を含む倒幕運動、北  
より各議院、内閣、大政奉還運動の中に、遠山  
うりように封建新再建<sup>端</sup>成の方向を見出すこと  
はきつめり容易である。しかし尊攘運動の  
發展の上に成立する武力討幕の路線には幕藩  
体制否定の方向加ふため明確化してあり、  
遠山うりの見解を拒否するものがあると考えらる。  
だがこれだけいへば、堀江や井上とみうれば矛  
盾は解決しない。そこで、武力討幕を推進す



る  
『討』 幕派の新しい解釈を必要とするのか  
ある。 其れを本節の『討』 幕理論の成立の方  
所において追求してみたいと思ふのである。

二、中岡慎太郎の場合

土佐藩の、大政奉還運動の中心であつたに  
目のかわり中、復古党（後述）といわれる薩  
・長兩藩の勢力封鎖の路線に同調するが、ル  
フ加のりりみう北た。そのもつとも中心のた  
人物は、中岡慎太郎である。板垣退助の後年、  
もし中岡が生きてもあれば、一廟堂にたう、大  
臣参議となつて、西郷隆盛や木下孝元と肩を  
並べ、主権をやつて行ける人物であつたと  
のやていふことは、徳川維新政府の中心に在



り、このコースを歩いて見たこと、  
力村幕達初め指導的人物の一人であつたこと  
を示すものゝほなからうか。

中岡慎方氏は、天保九年土佐安芸郡北川郷  
の大庄屋の家になれ、安政四年僅か二十歳で  
大庄屋見習となつたが、その翌年大地震の被害  
をうけた村民を救ふため、他の庄屋等と共に  
藩にたいて金穀の救恤を要求してゐる。こ  
のときの彼の行動には、農民の代表としての  
幕府権力と対立的な側面と、同時に決して近

代所では、自ら治者意識を覚かせるつた。こゝ  
した行動は、天保期に土佐藩にみられ、大庄屋  
同盟の動きと、政治意識の面では共通するも  
ろかあった。その後尊攘運動に共鳴し、土佐  
勤王黨に加わり、北のや直ちにこれに加盟し、  
武市瑞山に指導されることになり、五十人組にも  
参加していった。いふは尊攘尊攘派として、もつ  
とも典型的な存在であったといえる。この中  
に、文久三年二月従目付に任命されたこと  
と「有志の上笑する所なり」と吉村虎次郎に



冷笑さるべきことは、先述のように彼の立場か

武市瑞山らの

『一藩勤王』

論的立場にあつた

うたと示すものがありう。

しかし彼の解も、

本質的には、

先に

つゞた

ようにな

草莽崛起論の

立場に立つ

政治

~~勢力~~

に属して

いた。

大町格

月加

「中

國は

我

市派の正事也

と思ふ

思ふ

に

正事也

と評價した

のも當然である

文久三年九月

彼は、

一藩に

股藩して長州藩に

入り、

三田

及に

あつた

三

條山

奥美

らの

下に

投じ



た。この後の彼は、長州尊攘派の成長と共に  
あり、元治元年十月には先述の如く、「  
とのかへて此<sup>點</sup>すべし」と<sup>土佐</sup>佐在藩の同志に  
書送ることとなつたのである。しかし彼の長  
州にあつたといふことは、彼のみならず土佐  
尊攘派にとつてきつめな事であつた。此水  
は長州尊攘派の<sup>先づ</sup>先づの要であつたといふことは現  
在主義的を考へる方に影響するものがある。  
これの如く紹介する中、國情をわづかに  
この長州尊攘派に影響され、また同藩にあり

了目まぐるしい政情の激変の体験を通じて所  
 成されていつたものがある。これ加ふが慶應  
 元年の<sup>高</sup>幕に執筆された『時勢論』と云ふ<sup>(16)</sup>に。  
 これは一書にこの節は最早や田舎の迂闊先生  
 に偶々逢ひ、時勢に後れぬ諦承ぬものは何と  
 各の毒にこれ同、諺云井蛙の見に雨落ちるを  
 此<sup>さ</sup>の<sup>し</sup>様<sup>よう</sup>に<sup>こ</sup>と、在藩の同志に書送つたものの  
 であらう。これは尊攘派の敗北をのりこえ  
 新しい方向の提議である。御かここで主張し  
 ているのは、(一)尊攘派の立場にたつた富国强



兵策の推進、  
天皇への権力の集中の二点を  
あげた。

第一点については、

富国強兵と云ふもの

は戦の一字にあり

といふ言葉に、

その本質

が露微かに示されてゐる。

武備充實の語に

至つては、或は國陋の是に

至るに暗きあ

り、又は實の卑弱上より出た英断ありとい

われといふより、すかに彼にとつては、武

備充實、富国強兵策自体は自明の二とであつ

た、たゞその如何なる政を推進さるるか

か  
し  
皮  
の  
富  
列  
名  
氏  
衆  
は、  
あ  
く  
ま  
で  
「  
戦  
の

嘉永六年

力也



なりた『暴客』

の立場をわきまを運ぶ、

富強兵策の推進

の契機にして、

水藩の暴客に成る勢力を醸し、

内外の要、薩州の暴客生勢に發し、

年生要子仲、長州は馬場、暴客に發し、

五月、下関、仲、且、暴客に發し、

吾輩は世略に似て、國に益ありと雖、

も、時勢一変、

不の世となし、

死地に陥れ、天下大府、

しとて、いり、水戸藩はともかくと  
 い、薩長両藩におつては、果敢とすべし  
 尊攘派の急進的な行動こそが、藩体新全と  
 幕藩体制的の支配秩序とは異なり、新しい  
 制への統一、木戸孝允の言葉によれば「割拠  
 の制への統一と可能にしたといふのが、あ  
 る。しかもこれは「天下大存存の要也」であ  
 り、「割拠」は制への目的意識的に把握する思  
 考態度である。いふまでもなく、これは「割拠  
 をのりこえ、天下と統一するたため」



基本「、すなりき」「勅王」「討幕」のため

の方途であつた。

このふうな方向が確定する。ことになつて、

はいめえ「国師の見」になつた。「早見家の

手書」としての「武備充實の論」すはわう書

國語音楽の確立するといふやある。彼は長

州藩の場合について、「馬場の戦争同き、あ

ゆゑ部を生じぬ。内外の大難一時に迫り、

外は表に和し、内は天下の軍兵を引受け、遂

に内輪の戦迄に至り、いふ、いふ五部（桂、

木戸孝元、東行（高杉晋作）の如き、昨  
英より帰りに市上町多（警署）・伊藤俊輔（博  
文）等の如きもの国君を神佐し、所置を得た  
より國體大に一変りし故、子孫に一新し、二  
國（防長二州）の人民悉く必死不逃の地に入  
り、是に於てか上幕幕、専ら其に在り、武備日  
々々々、此の論は議論たゞくして實行と相成  
り、悉く國中の大勢を一新し、鉄砲の一隊の  
みならず、銃はミキール・砲は元也。長玉等  
に之を新しく改まり、又騎馬隊も盛也、



國中に毎日大隊訓練せられ、先づ一冊に  
大抵四十八隊位は一度も断つた日なし、其  
上その勢あたるや、此の一事は全く戦  
争の功とし、他に如何様に任りたくも出  
来ぬ事にして、此と云ふところ、其  
の具體的な内容はあつたのであつた。こゝに  
は海軍創作者が再編成され、その中に洋式軍  
備を中心とする富國強兵策の推進される  
のである。このことは、<sup>海軍</sup>尊攘派として、新し  
い形での権力者への力進をもちえなう、まゝ、

幕藩体制を否定し王政復古を主張して幕藩体制  
 制の内部的反對派であつた改革派に彈圧され  
 た中園博をゆが、このように主張してゐるこ  
 とは、あきらかに王政復古へのプロパガンダを  
 思想的に實踐するための權力的基礎を積んで  
 る理論を獲得したことを示してゐるといふこ  
 事。  
 だがここで注意しなければならぬのは、  
 中園が主張してゐる幕藩とは一俣いである  
 權力体系であらうかといふ問題である。かつ



この草莽尊攘派は急進化することによつて、  
日藩を敵対物としてしまつたが、ここでの  
日藩は決して敵対物でなかつたことは右に  
のべた通りである。この新しい日藩の性格  
をあらうかにするたりに、第二の問題案に移  
るねばならない。

第二点の天皇への権力の集中は、7内には  
大義名分を明にし、榮政一致と共に各朝廷に  
帰し、天下の大本を立つを以て急務とし  
といつた形をとつて現われてくる。この限り

では勤王党の王政復古論と同一であるか、決して草莽崛起論的主張をとらないことが注意されなければならぬ。彼は「封建の勢をすや利害相及す」として、封建制に利害相及する両側面があることを主張する。「大命攘夷の必要」に出づ、而して天下是れを舉~~行~~ずること能はざれば議論百端各異なり、国体茲に於てや立たず、是則ち封建の害ある所也」として、封建的割拠体制が、攘夷のための国内統一を不可能にする点を指摘するものである。ところか彼



は、他日國體を立て外夷の輕侮を絶つもの  
 あり二藩に委くするべし、是又封建の天下  
 に功ある処なり」として、薩・長兩藩が自藩  
 に割拠して、**「暴客」**の**「戦争」**の功と通に  
 二藩内訌を整備し、外圧に對**「抗」**する可能  
 性を備える利益を認めらる。彼等王政復古  
 論の士名にこのようなる理解があらはな  
 るものも重宝である。なほさうら、**「草莽」**<sup>小幡</sup>**「起」**論的  
 王政復古論は、**「封建」**の害ある所**「に」**たいす  
 る反對の**「根」**を根ざしていた。たのうそのよ

な裏蔭制制定論は、その論者か、蔭制の  
う跡外されるのは必然である。勤王党の敗北  
したのは、新しい權力体系樹立の手段とみな  
ないまま蔭制のう跡外されたからである。  
ところが、封建の天下に功ある知を認め  
るに至つたことは、かつこの勤王党の二とく  
蔭制のう跡外されず、蔭制を王政復古の  
工台にする方向を提示したことになる。二の  
より、中国の主張する王政復古論は、  
裏蔭制  
新克服のために蔭制を利用するきわめん現



美的な政治路線たりうるであろう。

中国はこの『時勢論』において、あくまで

『暴客』 専横派の立場にたつたもの、又

名如の草莽専横派かもしない素朴な排外主

義的専横派論および草莽崛起論的王政復古の

主張か、一時勢に後れ論としてあり、非難

の見してあるものの批判を、在藩の工佐勸王党

員に新えこいたりである。このような中国の

見解は、彼と『藩』との関係か、変化したこ

とを示すものである。ここでは、『藩』加健

あの幕藩体制新一組織としての『藩』ひめな

く、幕藩体制新克服のための組織としての『藩』

に、いいかえらうは、毛刺家や島津家の

『藩』はもはやなくなってしまうの

がある。彼が「自今以後天下を興さん若は、

必ず藩長たるべし」と言え、文應二年一月

に結ばれた藩長同盟の劃策たりだとい

ことは、そのこととを明らかにするものがある。

だがこのように『藩』の内容が変化したとは

いえ、かつこの草莽草莽派がもつていた『藩』



『と敵対関係にたつ反封建的性格は、封建制に「功ある処」を認める以上、否定されるべきでない。この問題は改めて論ずるか、尊攘派の變質の上に成立する討幕派の性格規定のたゞの重要な要素であらう。

中国はその後、右の『時勢論』（論策Ⅰ）

と同様の方向をもつた論策を、慶應二年十月の『竊かに示知已論』（論策Ⅱ）、慶應二年十

一月の『軍制改革論』内容として、『島嶼論』

に記さるるに示す（『時勢論』（論策Ⅰ））、および慶應二年

三年夏の旧稿を神習した『時勢論』(一) 論第四

を發表してゐる。これが大おのれは、在の

『時勢論』において主張されたいた諸要加、

一層具體的の展開されてくるのである。

また富国強兵策に同じくは、海外諸國へ

書生を出し、或は外國人を雇ひ、國產を充ち

新點と大に國を固くし、如此して忽ち武備

を設け、兵を練ひ、名方條理を能くする強要

の外賊を討つべし(一) 論第五と外國の方針

を明らかにしてゐる。これをあつた、これは「東

と明らかにしてゐる。これをあつた、これは「東



の攘夷の策は、今日保く外夷と結ぶに在り  
(論策Ⅱ) といふ、あついは「右の如く吾新  
のるを諦すれば、唯西洋好きにて、攘夷の論  
はなきことと思ふ人もあつたり、此は  
最も攘夷論の實用也」(論策Ⅲ) と主張され  
てゐるやうに、少くとも主觀的には尊攘派の  
立場に立つてゐることと主張してゐるやうであ  
る。富國強兵策を具體的に實現していくため  
には、海外貿易の展開と洋式の近代の軍備の  
導入は必然的である。中国もその重要性とは

つまり認識してゐたのであるが、しかしなか  
らぬ加「異考」の立場を嚴守する限り、たと  
えば長州藩の改革派政權による『航海遠略策  
』とは本質的に異つた國國方針が主張されな  
ければならぬ。それ加「攘夷論の實用也」  
といふ觀念に他ならぬであつた。いゝかえりな  
らば、王政復古といふ國家的統一の方針と結  
びつゝいた國國方針の提起であつて、「富國強  
兵は戦の一字にあり」(編策Ⅰ)とする先述  
の觀念の発展に他ならぬであらう。従つて



「攘夷論の實用也」と論ずるのは、決して主觀的に尊攘派の立場を確守しようとする態度に止まり、改革派の完國方針とは質的に異つた方向加へてにみられるのである。

このような親吳に立つた軍制改革論は、『論策Ⅲ』に展開されてくる。まず『海軍』に

ついでには、「別に不案内」だからとして、「

船の仕法肝要なる故に、大阪辺の豪商と結ひ、

洋商公會の法に習ひ、商會を結ひ、下関、大

阪、長崎、上海、香港等へ此の局内の者とた



し、大に國賊を養ふたうは、海軍の助になる

べし」とおりのべている。

これにたいして『陸軍』に關しては、のな

り詳細にその改革策<sup>を</sup>論じている。その第一

に「兩國中一田銃砲隊」にするにと、大砲

小銃若世界第一等の利器」とおめると等軍

備の近代化を計るにと主張している。さう

に「市馬廻以下家来又者に至る迄（藩の室臣

を除く家臣全員を嘉味する）、皆一様の<sup>兵</sup>制

にするにと、軍局に入る者は大抵十六七歳



より三十歳を限りとし、壮士を撰み、着實を  
本」とすること、さうに「國家の輕重存亡を  
爲す大兵なれば、給料十分に遣はされ、内職  
するより兵に入りし方が助りに相成り難有と云  
ふ様に有之度」云々と主張されてゐる。こ  
こでは幕藩体制的な身分秩序に経つた軍隊で  
なく、それより格別を否定した軍隊の組織  
が主張されてゐた。「給料」を十分に與へる  
という主張は、そのような方向を裏づけるも  
のとして重視せねばならない。ところかこ



家の心悟に取立たる者故將卒一致、追々強兵

となり、長州においては士民を「不諭」

國威を輝けたりとのべているのである。

組織したのやあるか、土佐においしは農兵

を「不可」としたのは何故かといふ問題は

残るのやあるか、彼の軍隊組織の原則か、我

士身方だけにこだわらない「有志家」を組織

するにあつたところに主眼かあつたとみえり

非なるならなつたであらう。要するに幕藩体制的

身分秩序を完全に否定しよとした要は、

長州の兵制も中国の主張する土佐の兵制も同



一であつたといえるやある。

以上のやたよるは中國の主張する軍閥の

の方針は、部分的にみるならは改革派の方針

と同様のものも見られるやあるか、全體と

してみるならば大きく相違してゐた。『藩』

体制の強化を自己目的として提えるか、ある

いは手段化してゐるかの相違がある。中國の

主張は、「封建の勢力もや利害相反する」

論策Ⅰとあるように、『藩』体制を客観化

したところに成立してゐたやある。従つて

「大阪迎の豪商」と結んだ積極的な海外貿易  
を主張してゐることは（論策Ⅲ）、それが軍  
事的な必要から主張されてゐるにせよ、彼  
の『豪商論』の本質がどこにあるかをわつとも  
あきらかに示してゐる。「大阪迎の豪商」す  
なわち全国市場を掌握してゐる特権的商業資本  
本と結合した積極的な海外貿易論は、その院  
一國家の内幕はともかくとしても、國家の統  
一をなしたた権力を背景にあることによつて  
その実現性をもつ主張である。改革派の海



外貿易論加、幕府の貿易独占に抵抗する精々  
藩閥貿易の域を脱しないのにかゝりして、中国  
の海外貿易論は、統一國家の權力を背景にし  
た字義通りの重商主義政策であつたといわれ  
はならぬ。ここに彼の論策の本質が示され  
てゐると考えるのである。

以上のやうな中國の见解は、もはや尊攘派の  
理論から一段階飛躍したものだといわれはな  
らぬ。従つてわれわれはこの中國の见解に  
討幕派の理論の成立をみるゝと如何なるのや

ある。

ところかここむとりわけ注目されるのは、

中国如導攘派の理論を一般に飛躍させるにあ

つて、常に念頭を離れなかつたであらうと思

われる問題がある。それはいうまでもなく、対

外的危機の問題であつた。

「導王は即ち善し、

攘夷は不可なり」

とする、開國論者たちは、

これと交はり、信じて盟へは、何そ彼外

國を惡み恐るゝであらん

というか、

「若し

一大強國起るやうは、

「公儀も自然廢し、



忽ち小弱の憂となるべし」(論第Ⅱ)と彼は主張してゐる。さらにまた「癸丑以来十数年、矢張武備荒廢の名を以て空しく年月を過し、五十州の内亦は因循固陋の眠を覺すこと能はず。――上下一致、學術を励み、兵力を養ひ、早く攘夷の大業を立て、諸港の條約を一新し、遠海の國々にも征服し、会稽の恥を雪がされは死すとも止まわと決す矣」(論第Ⅲ)とも主張してゐるのがある。このように彼の尊攘派の討論への飛躍は、あくまでも

攘夷を徹底させることと通じてでありた。彼  
が實質的に國國論者であつたにもかかわらず、  
國國論に反対するのには「平素實地に立ち、其  
得失を聊知り覺への論」——「論策Ⅱ」にあると  
主張してゐるように、彼自身の長年の實踐的  
経験を通じて、攘夷論を主張してゐるのは、  
恐らく改革派的國國論への反対によるのでは  
ないかと考へられるのであるが、そのことは  
改革派のな幕藩体制異權化ではなくして、幕  
藩体制否定の上に立つ國家的統一とその内容



たうしめよとしといふと思われろのがある。

といふのは彼が『攘夷』に民族独立の意を含

めさせようとしてゐるからである。『水攘

夷』といふは、皇國の私言に非ず、其止むを得

ざるに至つては、宇内各國皆之を行ふもの也

』として、その身作例にふり加て獨立戦争を

取上つたのである（論策Ⅲ）。このようにして

メリカの獨立戦争も『攘夷』であるといふ發

想は、それに加へて近代の各國國家の政體

を目撃するにこそ、その根拠すといふは

いにしても、改革派も含めた幕藩領土制に  
はみちみちた民族の統一への悲願と其の攘夷  
論<sup>に</sup>にめいたこと<sup>に</sup>基づくものであつたと  
いえる。このよきな民族の統一への主張が、  
同時に「遠海の國々迄も征服し」と對外侵略  
主義を内包してゐたことと忘れはならない  
加、とにかく民族の独立、國家の独立あるに  
は民族的統一、國家的統一こそが『攘夷』の  
本質であるとする彼の發想は、彼のこの討幕  
理論の意味をきりぬく重要なものとするであ



う。

では御は、このよき形勢の國家的統一、

民族的統一、を考慮していたであらうか。具體的

な次第として御が主張したのは、大政奉還論

であつた。「今日の第一は無他、政權を朝廷に

返上し、自ら退く道を治め、臣子の方を盡す

にあり、強て自ら威を張らんとせば、則ち必

滅無疑、諸侯若し信あらずば、早く忠告し、

一大諸侯となり、永久の基を立せしかつと

いふ「助徳川端」加筆である（端第Ⅱ）。



ここではまだ武力討幕論は、直接的には考へ  
られぬいたつた。だがこの大政奉還論は、  
後述する慶應三年の土佐藩による大政奉還論  
加、武力討幕論に<sup>対し</sup>、妥協論として提起  
されたいとのとは異つて、『攘夷』のための  
國家的統一の具体策として提起されるものの  
にあつて、決して妥協のための政策論ではな  
かつた。むしろ徳川幕千歳の罪状を宣明、  
家歸却て賊却に至らんは必然なり（論策Ⅱ）  
）といふ、あるいは土佐藩の場合には「出軍



の時は現行三令の二を出し（端策Ⅳ）との  
やりとりとこのより推察されるように、武力  
討幕と対立的にではなくむしろ直ぐにそれへ  
転化しうる可能性をもつたものとして評價す  
べきであらう。中岡博太郎は、後述するよう  
に武力討幕派の中心的人物となつていくの  
がある。ところが武力討幕への転化の可能性は  
与られず、その後の統一國家の権力状態に  
關しうは、何等の具体策ものゝ如くない  
のである。精々、幕府と「諸侯」たらしめよ

うとするところのう窺われるように列藩会議  
論が推測されるにすぎない。従つて武力討幕  
後の権力形態に關しても、やはり天皇の下に  
おける列藩會議の體制が指向されるにすぎ  
なかつたか見られるのである。結果的に  
は中央集權的な單一不可分の統一國家が實現  
するものがあるが、その方向が具體的には構想  
されたいなかつたといふことは、やはり討幕  
派の性格を、後述するように端的に示すもの  
であると考えらる。



以上のやうな中國の见解は、尊攘派の立場を  
貫くことによつて幕藩体制再強化の立場を否  
定したところから、改革派の理論と全く相対立  
する见解であつたといえるのである、さらに  
尊攘派にみられる草莽崛起論の名方論的傾向を  
脱却し、現実的<sup>主</sup>義的な『藩』論を主張してい  
るところに、尊攘派のうの飛躍がみられるの  
であつて、ここに討幕派理論の成立をみるこ  
とができると考へるのである。



三 坂本竜馬の場合

高知城下の道廻家であり郷士の家であるが、  
谷屋に生まれた坂本竜馬は、土佐勤王黨の中  
では最もとも開明的な存在であった。それは  
高知の画師河田小龍に啓蒙されたのらである  
たとわりわかれしている。この河田小龍は、漁師中  
津万次郎が高知に送還されたとき、これ  
に海外事情を聴取した土佐で最初の同国思想  
の持ち主だったのがある<sup>(21)</sup>。しかも彼の家は、高  
知において屈指の豪家であり、慶應三年西



郷隆盛が来訪した時、西郷の口をきいた士分は  
取立てられようとしたのでかえって困惑したと  
いわれてゐるような家であり、いわばもつと  
も商人的な家になつたのである。<sup>(22)</sup> このような  
事情は、彼の政治的な行動加、草莽草莽派に  
ありかつたであつた名方派的觀念的傾向から  
縁遠い由のがある。あつた商人的な現金主義  
的態度が強く現われようであつたことを想定さ  
せようであらう。

しかし同時に、彼の武士意識から縁遠い存

在であつたといふことは、『一藩勤王論』に  
みう水は現在の藩権力に依拠しようとする態  
度を容易に脱却させる可能性もつたといふ  
もいえるのである。徳川勤王党結成後直ちに  
これに加盟するのやあるか、その首領武市瑞  
山の『一藩勤王覚』に失望して、文久二年三  
月二十四日早くも脱藩してゐる。水は吉村  
虎太郎らに続くもので、土佐勤王党員の脱藩  
者といふはごく初期に属するものであつて、  
當時京都にあつて、平野國臣、真木和泉らの



挙兵に参加しようとするわけであつた。この  
より、彼の行動は、彼が草莽黨懷派の中であ  
つても急進的な立場にあることを示すもので  
あつた。土佐のいもほりともなふともい  
われぬいふおろおろに生じて、一人の力で天下  
このすゝまを、是又天がする事なり、かお申  
てもけして、つてあかりはせわし文久二  
年十月二十九日付、姉乙女宛書状と自らに  
ついでこのやういふことは、彼が高人出身うし  
く武士意識を完全に脱却してゐることを示す

ものやあつた。とりわけ「一人て天下うこか  
すへき」といふところには注意しておのれ  
はなうない。彼には山内宗室を同志と考へる  
よりな意識は、最初かうみられなかつたので  
ある。そこには草莽尊攘派にさえ強く強つて  
いた武士意識が、全くみられなかつたのも  
いゝであらう。

このようにある意味ではもつとも反封建的  
な存在であつたにもかかわらず、といふより  
むしろ是うであつたが故に、名方派的な要求



政室疎な親密的な尊攘派の一揆主義的立場を  
 容易に脱却することゝなつてゐる。彼は  
 早くも文久二年十月勝海舟の下を詔せし、其  
 の開國論に服し、「土佐勤王獨唯一ノ開國家  
 となつてゐる。あつた。だから、文久二年五月  
 の下関における長州藩の行動について、「長  
 の輕挙するを諷りたる羅ハ、貴説にて明瞭せり」  
 「文久二年六月廿九日、萩前藩士村田巳三郎  
 との對話」といふ判斷もつてゐる。あつた。  
 また同年六月二十六日、老中山望原長行龍表裏

の計画をすすめて、~~既に~~長州藩士を「説解」し

ていふのである。<sup>(26)</sup>幕臣大久保忠寛が、彼を「

大道可解人哉」(文久二年正月付、横井平四

郎宛書状)と評價したのも至極當然のことであ

ったといえよう。<sup>(25)</sup>

このよきな坂本竜馬の立場は、開國論を主

張するところによつて草莽尊攘派からは一歩踏

みあたところにある。他方勝海舟のには保元よ

つて山内忠実から脱藩の罪を許さぬ(文久三

年四月)<sup>(28)</sup>、あるいは大久保忠寛から越前藩の



松平春岳に「真ノ大丈夫ト存」と紹介され  
 いふように、<sup>(29)</sup>改革派の勢力のりも受入れられ  
 る柔軟さをもつていたのがある。彼はその  
 晩の婦人女への書状に、「竜馬<sup>五</sup>三家の大名  
 とやくそくをいたし、同志をつのり、朝廷  
 より先づ神州をたもつの大志を立て、夫々江  
 戸の同志<sup>はたもと大</sup>名<sup>名正金殿々</sup>と心を合せ、右申所の女更を  
 一事に軍ひたし打殺、日本を今一度せんたく  
 りたし申ねるゝいたすべくとの神願をこめ  
 (文久二年六月二十九日付)とのやうにしてい

るより、彼の政治路線は、直接的には改革  
派的幕政改革論の域を出ないものであり、そ  
れは「朝廷」(天皇)より「神州」(日本國)  
と重視するところによりて尊攘派の一義的に「  
勤王」(王主)を主張する親念性を批判しよとす  
る態度にも窺われぬのであるが、同時に「幕吏  
王」(幕府)に軍つたし打殺しと反幕の挙兵が考え  
られ、あり、さらに「神州」(日本國)と重視する態度  
には、それか「土佐のいもほり」(加主)張し  
る美からいつて、先述の中間橋太郎にもみ



うれた民族主義的傾向をみることはできない  
たうか。

ころ、彼は元治元年十月薩摩藩に保護さ  
れるようになり、さうして慶應元年（一八五五）に

入ると神戸海軍所解散後の勝海舟の門下を集

めて『社中』を組織し、平素は之（長州藩

所有、薩摩藩旗号、）『社中』乗組の櫻島丸一

に同志を乗せ、航海操船を實習し、め、機会

あらは更に北國、九州、ち限に航海し貿易を

営む傍ら、四方の政勢を観察し、あるところ

を目的とするに至つた。<sup>(22)</sup> 二の「社中」は、その  
後慶應三年（一八五七）四月になつて、『海援隊  
』と發展してゆくが、二の海援隊は、「運  
輸、射利・同販、投機・本藩の應援」を中心  
任務にするとしてその約規にあらわされた。<sup>(23)</sup> この  
ように坂平竟馬は、勤王愛のよろに「渠と  
かえり視點」をあらうとしないような挫折はな  
く、なお公武合作の立場に立つ薩摩藩に近  
づくと共に、当時各藩が異作的に取組みはし  
てゐる富国強兵策の一端を荷う可能性を蓄積し



はつめいたのがある。

こゝして坂本も新しい転回をほじめるに至

る。すなわち「一人の力で天下を動かす」

とする態度を脱却して、「私一人に、五百

人や七百人の臣引て天下の爲するより、二

十四万石（土佐藩の石高）を引て天下國家の

師爲致すの道よろしく」との方向を提唱する

に至る。<sup>39</sup>二の「二十四万石」すなわち土佐藩の

石高に「天下國家の師爲致す」とい

う意識は、まさしく先述した中國の『藩論』

と同じものがある。ところが中国の『藩』  
論が、われわれのいう『戦』を通じて提起さ  
れるものであつたのたゞしい、故に場合  
の『二十四万石』の論理は、一つには公武合  
作論の立場から倒幕に転回する薩摩藩との接  
近を通じて、もう一つには社中や海援隊の活  
動を通じて伝得してまた貨幣経済の全国的な  
把握の方向から提起されたものがある。うたと  
注意しなげればなるまい。このことは彼の『  
二十四万石』の論理が、中国のよりに草莽山嶺



起論的王政復古の方向を徹底させること、す  
なわち勤王愛国大衆との密接な関係を通じ  
提起されるものやはないといふ点で、中国の  
『藩』論とは大きな相違があることを示して  
いふか、他方側幕のためには藩体制を利用す  
といふ方向は同一であることとを示している。

以上述べたことは、坂本の実藩体制克服の政  
治路線加、中国と同様ではあつても、権力奪  
取の手段にあつては協力的な性格を興える  
機縁になる。彼が後藤象二卿と簡単に同調し

ていくのも、<sup>(註)</sup>このようになまにあらうと考へうに

る。

(註)慶應三年二月、上海から帰り長崎にあつ

た後藤は、坂本に面會を求めゐる。坂

本はこのとき『<sup>註</sup>』の反對——後藤の勸

王党の首領、武市瑞山と名附した中心人物

であるといふことから——を柳えて、後藤

に會つてゐる。<sup>(註)</sup>そして「實に同志と知、

人のたましいも志も工仇國中で外にあら

るまいと存心と推稱してゐる。





996

四、割拠論の転回

「ともかくも各藩の識見ある人士は、此頃よりして姑く彼尊王攘夷の問題を措き、各々先づ其藩政を根底より改革する道ありや否やを講究するに至れり。蓋し彼等は、通きよりして遠きに及ぼす原則に拠らんとせり。空談をすて、實際に就けり。改革の順序は、宜しく此く如くならざる可からず。否是各人立脚の地歩を占定するなり。苟も此地歩を占定するにあらずれば、何れの方面に伺つても」



遂に何事をも爲す能はさるなりと大隈重信

は、元治元年以降の尊攘派の方向轉換を、後

年になつてからである(37)。

は、先述の中國慎太郎や坂本竜馬における討

幕理論あるいは木戸孝允の割拠論などにみら

れた尊攘派から討幕派へ飛躍しつつある維新

運動指導者たち、いはば過渡期の状況が、

そのまゝ者によつて解説されているといえよ

う。一藩政を改革する道にありかにする

ことを通じて、一人立脚の地歩を占定し



ようとする立場には、中國の田藩を討幕の  
秋、奥にうしめようとする見解、あるいは改革  
の目二丁四万石の論理と共通するものであ  
つた。

だが二の「空詔」を可て、實際に就くこ  
うとすべし。傾向は、尊攘派が討幕派へと飛躍する過  
渡的状況としてのみ現われていたのではなか  
つた。後述するように、改革派政教によつて  
主導されていた土佐藩においても同様であつ  
た。それは「諸侯割拠之勢」(慶応二年三月、小



並原唯八手録といわれている状態であり、全  
國的な現象ともいえた。浪沢常一編『徳川慶  
長公伝』が、戦国時代の「群雄割拠を想起し  
せしめ、天下は再び元・天を再現せん  
とするものであると表現しているのもまた  
のことであろう。<sup>(37)</sup>従つてこうした傾向は、幕  
府の諸藩に及ぶる統制が、全く失われつつ  
あることを示すものであつて、尊攘運動がう  
幕運動への強固な現われたと同様に、<sup>(註)</sup>改革  
派の公武合体運動の完全な行詰りの中から、



あり、可なり生れざるを得ない傾向でもあった。  
二のことは、徳川幕藩体制が内包していた一  
定の集权的性格が、新たな条件の下で完全に  
その意味内容を喪失しつつあることを示すも  
のであつて、いにかえるならば幕府中心の集  
权的体制が、それと相表裏する分権的体制に  
よつて押流され、新たな集权的体制形成のた  
めの過渡的状况に、幕藩体制全体が立至りつ  
つあつたことを示すものであろう。幕藩連合  
運動さうには公式合体運動は、幕藩体制がそ



のような方向へ押流されようとするの懸念にたいして、対外的危機に直面することによつて、早期的に幕藩体制の直直しをほかろうとしたものであつたにもかかわらず、幕藩体制内部の独裁的守旧派と外からくる尊攘運動の激化と、さうに幕藩体制の経済制度の再編成を不可能にし、ブルジョワ的諸関係の成長に順応できなかつたがために、元治元年には完全に行詰つてしまつたのである。しかし迫りくる対外的危機と幕藩体制の経済制度の再編成を



不可能にした諸要素とは、よりすみやか  
にしてより徹底した国家の統一つまり中央集  
权的な权力機構の確立を利めていたとい  
わねばならぬ。このような過渡的状況が、ま  
さにこの新体制創といわれるものであつた。  
従つてこの新体制創は、直ちに集权体制へ転  
化可る前提であつたのであるが、何れの立場  
に依つても、またどのような形態の集权体制  
への転化が可能となるかについては、きわめ  
て不明確なものであつた。



(註二)

文久三年八月十八日の政変によつて尊

攘の意が京都を追放されて以後、公武合

体は路線が明確化してゆき、それが同

年十二月の参預会議の成立として具體

化していった。にもかかわらずこの会

議は、長州藩の尊攘の弾圧に因つて

意見の一致をみたのであるが、對外

貿易の主導権をめぐる、幕府と薩藩

諸侯との間に対立が起り、僅か二ヵ月

で解散してしまつてゐる。公武合体は



的政略路線は、ここに空中分解して、

まつたといわねばならない。

(註三) 二のことは、草莽層を含めた運動参加

者の性格からみるのではなくて、むしろ

王権が、國民國家形成への過渡期

に於いては、封建的分権的体制の反動

物にうろるという意味から、  
「奉勅攘

夷」・「勅王」という彼らのスローガ

ンが、客観的に天皇の地位を統一國家

の模範としめうる役割を果たしつつあつ



たことか、評価されねばならぬのであ  
らう。

(註三) 天保改革が、幕藩体制的経済制度の復

古的再編成と、一つの重要な目標にし

ていたにもかかわらず、大體において

失敗に終わったことは、そのような形態

の再建及動か不可能になつたことを示

すものである。しかも安政改革にみい

ては、重商主義的政策をとることによ

つて、新たな対応の方向を見せ、幕藩



取力の主直しを企図していたが、その  
幕藩取力が、皇國主義政策によつて否  
定するべき農奴制の事百姓体制新を基盤  
としていたため、可成り安政改革に  
おける經濟政策は自己懺悔の性格を内  
包していたため、その改革は~~不~~中改革  
派によつて支えられていた公武合体制路  
線は、空中分解せざるを得ない性格を  
もつていたといえよう。従つて事百姓  
体制を基盤として成立している徳川幕



藩閥新と前提と可る集権化の方向は、

全く成功する可能性のないものであつ

たといわねばならない。

しかしなかう割拠という二とを、目的

意識的に取上げていたのは討幕派のみであつ

た。たとへば土佐藩政軍派政権の中心である

前藩主山内容堂は、天下已に配網なく、諸

侯割拠之勢を成し、外夷猖獗皇威衰弱に懸

に付、諸侯戮力協心、皇威振挽回之基本を以

て被遊度被思召し（慶応二年二月、小笠原唯八手



録」といわれてゐるような態度をもつてゐた。<sup>(40)</sup>  
客堂にあつては、「諸侯割拠之勢」は求めず  
して起つた好ましくない現状にしか可成ない。  
従つて早く「諸侯戮力協心」の状況に立歸る  
ことが望ましいのであつた。要するに改革派  
にあつては、割拠という状態は、その反  
対概念への飛躍のための政策ではなかつたの  
である。ところが討幕派の割拠論は全くそう  
ではなかつた。高杉晋作は、長州尊攘派が元  
治元年大挙上京しようとした時、七月、禁内



の變を惹起し、一松者は所割扱も眞之所割扱  
が得意也、進祭も眞之進祭が得意也、らハの  
割扱不得意也、君の爲め尽す心は玉となし、  
くなく我身は瓦なりけり、……前句之尽す心  
は玉なしと申意は、君公の所上座を留むる也。  
即下割扱也」と主張してゐる。(41) この「眞之所  
割扱」あるいは「大割扱」の意味するものこ  
そが、先述の仲間の評幕理論と同一であり、  
彼らの曰割扱は、まさに統一のたための  
曰割扱であることとを示してゐる。



中國懷石郎の足迹の何時勢論は、  
「自今以後天下を興さん者は必ず薩長兩藩なるべし、  
……他日國体を立て外夷の輕侮を絶つも亦  
此の二藩に基くなる可し」と、薩長兩藩の割  
拠<sup>(註)</sup>を評価していた。このことは、この兩  
藩の割拠が、あまりかにその反對概念へ  
の転化の飛躍したることの意味をもつていた  
といえよう。このような割拠こそが、  
眞之郎割拠であり、下割拠であつたので  
ある。こうして高杉は、五大州中に防長の



腹を推出して、大細工を仕立てねば、大割  
は成就不致し（慶応元年、山縣狂輔宛書状）と<sup>(42)</sup>  
日割秘伝体制を固めた長州藩の独力でも、武  
力行便を辞せない幕府打倒の方何に明示して  
くるのである。

以上のべたように、日割秘伝論の転回の過  
程にふいて、われわれは日討幕臣の具体的な  
な方途が確立していくのを見出す<sup>(43)</sup>あろう。

(註)

薩摩藩にふいては、島津久光を中心に

公武合体運動が推進されていたのである

バ、元治元年二月彼らの期待していた考  
預会談の解散してしまつてかう、久々の  
下にあつて活躍していた大久保利通らは、  
新たな方向転換を示しはじめてくる。た  
とえば福長強硬論を唱えていた西郷隆盛  
の意をうけた高崎藩を以て、長州藩の支  
藩岩國藩々主吉川経幹にたいて、元治  
元年九月三十日、「幕府の儀も近來ハ義  
政、<sup>(マ)</sup>之ニ覇者之所置ニ無之、折角夷賊四  
疆を窺ひ以折柄、責て大藩たりなりとも



手とつなま合不申ては、皇國之義軍ニも  
立至リ、遺憾不沙ヲニ付、可成致即國旋  
度<sup>(43)</sup> (口吉川經幹國旋記口)とのべていた。  
また慶志元年になつてかうであるが、大  
久保新道が、「各國割拠之勢不可疑、依  
之、富國居兵之術、死ニ手と伸シ、国力  
充満假令一藩ヲ以ストモ、天朝奉護、皇  
威を海外ニ灼然たらしむるの大策ニ着眼  
するの外無之ハ」同年八月四日、薩藩大目付  
宛書状と、のべるまでに立至つている。<sup>(44)</sup>

このように薩摩藩の計しい勤王が、中岡  
や尊攘長州討幕派と同一の性質のものと  
は決して言えないのであるが、文久期の  
幕府ヲ扶助シテ王室ヲ興シ之んとシ朝廷  
ニ建言シヘエ治元年、大久保稿ヲ時々に送る  
意見書<sup>(4)</sup>とした公武合併運動とは大なる転  
換であつたといえよう。

しかもこうした方向転換と相並行して、  
「薩摩は自國取り堅め、國海一定いたし、  
汝以富國強兵に取り懸り、西洋器械も大



模取り空りせ、洋人も四五輩呼空りせ、操練

寺島盛大に相成りし（上巻忘二年正月七日、見

弟へ子ふる書）と横井小柳が評価する<sup>(46)</sup>改革

を推進してくるのである。この「自國取

り堅め」の國論に、中岡や長州尊攘派の

田村松山論が見出せるであろう。

だがこの新國論は、田藩をたとえ手段化

したとはいえ基礎としてゐる以上、尊攘運動

のたとえ部分的可能性にしろ内包してゐる及

封建的性格かうみれば、あまりかに後退であ



つたといわねばならぬ。たゞは元治元年  
の長州藩においてみられた百姓一揆的エネルギー  
が、すく組織しうる可能性も、この割拠論に  
おいては自ら否定されてくる。とりわけ、割  
拠体制の確立の途が明確になればなるほど、  
尊攘運動が組織した民衆的要素が求められ  
ていくであらう。だがそれは、改革の路に  
みられるように、民衆的要素を内包する、改革  
の完全な排除ではなく、改革を組織  
するための新しい原理を要請する方向にあり



てであつた。<sup>(註二)</sup>この問題は、後述する慶応期の  
討幕派政権による長州藩の改革、あるいは武  
力新幕路確立の過程において具現化してく  
るであらう。

(註一) 元治元年十二月には、長州藩内戦  
において、小部が豪農秋本針藏が「も  
しも将来操券の師手ではな  
らば、針藏の手をもつて百姓一揆を起  
し、まして、國家を回復致しな  
う」と、尊攘派を激励したといふ有名

(註三)

な話はい、そのことを認めていよう。  
大江志乃天は、尊攘派かう倒幕派への  
転回を通じて、日草莽派の排除され、  
そのことが国家統一の可能性を生み  
出したと分析している。この点にのべ  
てきているように日草莽派こそが幕藩  
体制否定の方向を提起した政治勢力で  
あり、さうに後述するように日草莽派  
を組織しえたかあるいは組織しえなか  
ったかという点に、武力討幕が大政奉



幕かの相違<sup>が</sup>成<sup>る</sup>か否<sup>か</sup>の  
し、草莽の組織の原理が、尊攘派<sup>の</sup>新  
幕派への転回を通じて変質していくこ  
とに注意しなけねばならぬであらう。  
こうした相違を同一性で不明確にして  
いふことを、後述するようには相対立可  
る政治路線であつた公明政治論と武力  
新幕を同一視する論と、大江は<sup>に</sup>犯<sup>して</sup>  
のである。<sup>(48)</sup>

① 尾佐竹 猛著 曰 明治維新 Ⅱ (上) ・ 四二頁。

② 甲上 清著 曰 日本現代史 Ⅰ ・ 明治維新 Ⅱ ・

二八五頁。

③ 鈴木 易石 郎著 曰 明治維新 史 講話 Ⅱ ・ 一七

〇頁。

④ 井野 辺 茂 雄著 曰 幕末史 概説 Ⅱ ・ 五五六頁。

⑤ 堀江 英一 著 曰 明治維新の 社会 稱道 Ⅱ ・ 三七

頁。

⑥ ~~遠山~~ 茂 雄 稿 曰 明治維新の 政治 過程 Ⅰ (一) 在



史学研究會編輯時代區分上の理論的諸問

題四・三八頁。

⑦同前・一二七頁。

⑧同前・三九頁。

⑨丹波新太郎「明治維新と地租改正」(古今

島新報)編輯著日本地主制史研究四・二

七九頁。

⑩大江志乃夫著「明治國家の成立」四・三二

一・三九頁。

⑪井上赤揚著

⑫ 同前。二八六頁。

⑬ 同前。二九二頁。

⑭ 平尾道雄著曰陸援隊始末記也。三頁。

⑮ 大町桂月著曰伯耆後孫象二郎也。一五九

頁。

⑯ 平尾前獨著。一五五頁。

⑰ 瑞山會編曰維新士佐勳王史也。九七一頁。

⑱ 同前。九七七頁。

⑲ 同前。一〇四九頁。

⑳ 同前。一一〇四頁。



②① 坂崎紫瀨編 「坂本龍馬海援隊始末」 (四)

坂本龍馬関係文書 ② 所収 一・一八二

一八四頁。

②② 塩見薰稿 「才谷屋のことなど」 (寧楽史)

苑 八号・七〇頁。

②③ 坂田坂本龍馬関係文書 ① 一・八七頁。

②④ 坂崎紫瀨稿・一九二頁。

②⑤ 赤堀白坂本文書 ① 一・九〇頁。

②⑥ 同 紫 ① 一・八二頁。

②⑦ 同 紫 ① 一・六八頁。

28

坂崎 前稿。一九六頁。

29

前稿。坂平文書。(-)・七二頁。

30

坂崎 前稿。二一頁。

31

同前。二一八頁。

32

前稿。坂平文書。(-)・八一頁。

34

同前。(-)・三四頁。

35

坂崎 前稿。二四二頁。

36

前稿。坂平文書。(-)・三〇三頁。

37

同。下隈伯耆白譚。(-)・一八一頁。

38

坂崎 前稿。鯨海醉侯。(-)・二三四頁。



③⑨ 張沢常一編 曰德川慶長公伝 占(三)・三六五

頁。

④⑩ 坂崎恭揚著・二三四頁。

④⑪ 曰東行先生遺文占・一三五頁。

④⑫ 同前・一八四頁。

④⑬ 文部省維新史料編纂会編 曰維新史占(四)・

四四七頁。

④⑭ 曰大久保利通文書占(一)・二九三頁。

④⑮ 同前(一)・二四七頁。

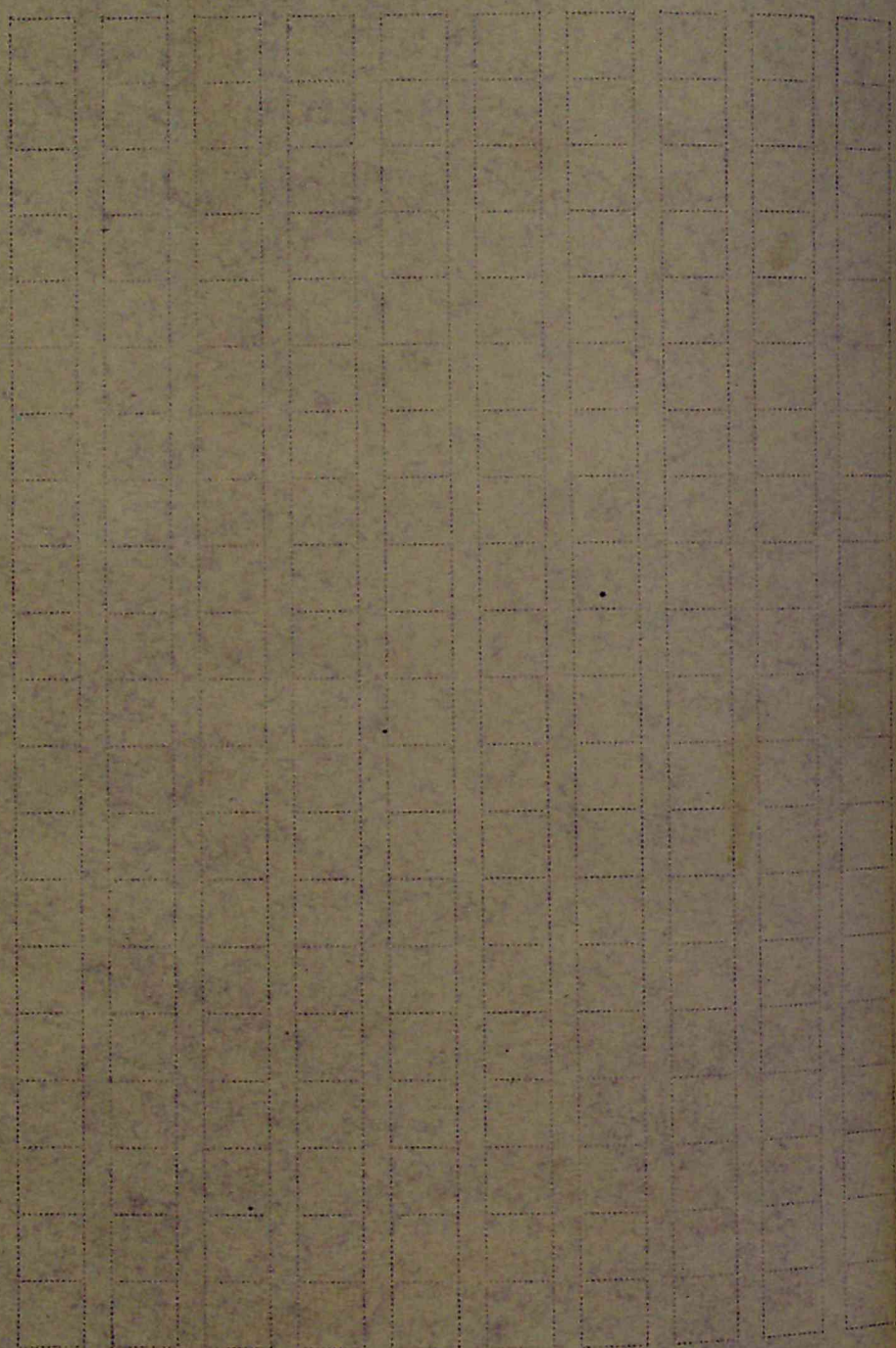
④⑯ 曰中村漢稿占・三一三頁。

④ 原口清穂「幕末一政變の考察」(正史)

研究一四二号。

④ 大江志乃天著「明治國家の成立」。





978

## 第二節 慶應期の改革

### 一、土佐藩の動向

——大政奉還路線の基礎——

文久三年暮かう元治元年にかけて、土佐勤

王愛は退けられ、いつたか、それは同時に、

針みこせ組がふたたび藩内主流に復帰してく

る過程でもあった。後藤象二郎・福岡孫次郎

孝弟・由比須内々の針みこせ組系的人物が、

預ついで藩内に復帰してきた。①後藤象二郎は、

元治元年七月大目付に就任するのであるが、②



それに先立つ同年四月、彼は、南國海・南成  
館の建設・長崎にあける藩営貿易・洋式汽船  
の購入を内容とする意見書を、山内容堂に提  
出していた。<sup>③</sup>このように針をこせ組の復帰の  
意味は、あきらかに吉田東洋を中心になつて  
推進していた安政改革にあける諸政策、とり  
わけ重商主義的政策を、より一層徹底させる  
ところにあつたといえるであらう。安政の大  
獄にあける処罰も、これを高知に復帰していた  
山内容堂は、改革派路線の推進を期していた



のひあるか、しかしそのためには、かつての  
ような字旧派的勢力よりも、むしろ改革派的  
路線へのリこえる土佐勤王党の弾圧が必要で  
あつた。彼が帰國後勤王党弾圧へのリたした  
ことは、先にのべた通りである。

こうして新あこせ組が復帰し、藩方の体制  
がおよそ整つたと思われる元治元年七月、藩  
主は、次のような布告をだしてくるのである。  
「私に尊攘の大義を首唱し、己が恥分を忘れ、  
僭越非分の挙動有之、更に不心得るに由、」



天封建の体として、天朝之命幕府に下り、幕府天下の大諸侯を率ひ、令を四方に伝ふ、其分義順序、固より不可乱也、故に諸侯藩と爲ては、上は天朝・幕府へ奉対、有るは報效と思ひ、下は一國の士民が望み、天々取守を知らしめ、内を修て外に向ふ、是則天子の藩屏たる所以、尊王の大義固より此に在る也と。④この布告によつて、針おこせ組の復帰による藩政の新たな展開の方向が、全くかつての改革路線かう一歩も出ていないこ



とがあきうかであらう。このように改革派路  
線の新たな展開は、依然として公武合体と開  
國・貿易の方向にあつたのであつて、幕藩体  
制を前提とした改革を目指したにすぎなかつ  
たのである。

しかも後継象二郎は、針小こせ組系以外の  
の改革派的勢力、とりわけ西小こせ組系との  
連繫を強化しようとしていた。元治元年十月  
高田郡奉行として、藩方へ復帰した佐々木高  
行が、自分の復帰について「到底伏幕家はか



りでは、~~新~~人<sup>人</sup>民が云ふ事を聞かぬから、政略  
上はむを得ず二派の意見を配合したのだ」と回  
顧しているのは、<sup>⑤</sup>この間の事情を、いまさか  
誇張があつたにしても、端的に示していよう。  
また計みこせ組系とは異り、後には武力討幕  
派になつていつた板垣退助および小笠原唯八  
も、後進から勤王道を弾圧して藩内の幕藩体  
制の身分秩序を維持・強化することがか先決問  
題であつて、南國・攘夷の対立は問題にある  
に当らないと誤得されて藩方に復帰してい  
る。<sup>⑥</sup>



後進を中心とする藩方主流は、このように  
 従来からの改革派的勢力を結集することによ  
 って、土佐勤王党によつてゆり動かされた藩  
 体制を再編・強化して、その改革の推進を期  
 したのであつた。獄中にあつた武市瑞山が、  
 「叔父内、所役人みななやまりけよし、  
 と小か、<sup>(野見)</sup>きのふ聞けハ、甚あとへ吾田組へ計  
 ゐこむ組——引用者——の人出たと申す、誠やううそ  
 やう志れず、誠なりは、所國はみたれる」か  
 人せんなるべし  
 へえ治元年七月一日、姉・栗丸



書状と嘆くのも当然であつたといふよう<sup>①</sup>。

こうして後年の建築にもとづく用成館の建

設が、慶応元年からはいじめられ翌年二月五日

用成館の運びとなつた。これは山内容堂によれ

ば、「西洋術を用申し」(二月二十三日、松平春嶽

宛書状)可機用であつた<sup>②</sup>、さらに三月十四日「此

度所<sup>先代</sup>改<sup>先代</sup>様所<sup>先代</sup>代之所法度所調之上、勅業・

復興之道所<sup>先代</sup>用被遊にほしと、藩政行か<sup>先代</sup>のべ

ていふように、安政改革の方針を受ついた重

商主義政策推進の機用として設けられたもの



であつた。<sup>⑨</sup> この用成館は、軍艦・復殖・勸業・

捕鯨・税課・鉱山・火薬・鋸造・原泉・政・

譯の十一局に分れ、かなり大きな規模をもつ

た機関であつた。<sup>⑩</sup> これらの各局がどの程度具

体的に機能を發揮したかは不明であるが、中

心になつたのは、右の藩庁の布告から考えて、

勸業・復殖の二局が中心であつたようである。<sup>(註)</sup>

(註) もろろん譯局におけるイギリス語・フ

ランス語の教授、政局における西洋政術

の奨励<sup>⑪</sup>、さらには中洛万次郎や英人語



家教師の招聘<sup>(12)</sup>の事から類われるように、各局それぞれ活躍していたものと思われる。

先づ勸業局は、藩内の商品生産を奨励し、その独占的な購買、およびそのための藩札発行等の機能を果していったようである。慶応元年十月にたてられた谷千城らの藩への建白書に、<sup>(13)</sup>「此度藩幣の略<sup>(14)</sup>は、用成館へ諸品買入の策より専ら出ては由し」と主張されているのは、この勸業局の機能を簡明に表現しているとい



えゝたろう。

すでに文久三年、樟腦の藩による購買

独占が行われてゐり、<sup>(14)</sup>また慶応元年には、主

計総生産額八〇万両余もあるといわれていた

紙の、<sup>(15)</sup>所手先商法と称する藩による独占的

な購買がはいめられてゐる。その他の商品に

ついては不明であるが、明治二年三月、外国

交易適用の品として指定された二十二種の國

産物について、全て津口及び國境搬出が禁せ

られ、当相場で開成館勸業局で買上げる規定



になつてゐる。<sup>(46)</sup> これらのことか、<sup>(47)</sup> 勸業局に

あいて、藩札によるかたうの広汎な國産品の購

買独占が行われていたと考えられるのである。

ついで殖産局は、藩官<sup>(48)</sup> 要<sup>(49)</sup> 用<sup>(50)</sup> のための機関で

あつた。すでに文久三年三月頃から、國産品

の銅・樟腦<sup>(51)</sup> を見送<sup>(52)</sup> りにして、小銃購入の計

画が策められていたように、藩官長崎貿易は

南成館創設<sup>(53)</sup> にかう考へられていたのであり、

これが南成館殖産局の設置とともに本格化可

るものである。まず慶応元年、南成館設置のこ



とが決定されるとともに、十月二十一日大坂  
在役百貨殖産局掛りに兼任させ、大坂における  
國産品販賣を取扱わせている。これが百貨殖産局  
大坂出張所であり、その後長崎にも出張所が  
設けられていくが、その後慶応三年十二月大  
坂が閉市されるや、長崎は縮小され大坂の中  
心になつてくる。その後明治之年にかけて、  
堺・兵庫・大津・東京・神戸にも出張所が設け  
られていく。<sup>⑧</sup>要するに百貨殖産局は、藩内で生産  
される商品の藩外移出および海外貿易の機関



として設置されたものであつた。後述するよ  
うに後年衆二部は、慶応二年七月長崎に赴く  
が、その目的の一つは長崎貿易の推進にあつ  
た。そしてその際彼は、貨殖局の大坂・長崎  
出張所の設立・運営資本として十八万兩借入  
れてゐた。

以上のべたように、この開成館は、土佐藩  
に於ける重商主義政策の中心的機関であつた  
といふよう。そしてこの重商主義政策は、安  
政改革の中心課題を具体化したものであつた。



か、さうに行政改革が内海防と内題に要請、  
小て皇商と戦政策をとるに至つたと同様に、  
この場合にありても、この内成館に於ける政  
策は、単なる富國策にといまうまかつた。山  
内富貴が、自ら四月二十一日、内成館造営  
專賣殖之道主張致とも、唯利のみ見ゆ訳にて  
無之、富國之基を削き、強兵之実を得んと欲  
す、――右等吾一家の富強を謀るに非ず、即  
ち皇國を保護する而已と藩士一同に訴えて  
いることかうそのことはあまうかであらう。<sup>20</sup>



このことは後述する。ような用成館政策への藩  
 内の反対を抑えるための措置ではあつたか、  
 そこには、改革派の立場からする対外的危機  
 意識が強く流れていた。従つて長崎貿易を通  
 じて輸入されたものは、ほとんどが軍備の代  
 代に代つたためのものであつた。

慶応二年八月から一年の長崎に於ける藩

項目	金額(両)
船舶類	三一七、九〇〇
鉄砲弾薬	四三、二二二

の支出金額は、総計  
 で四一五・〇三五両  
 であつて、その内譯



段	正
國書・政務具	二、三一四
商館建築經費	四、七〇五
吏員俸給	二、四五八
藩士洋行費	一、九三〇
饗応費	三、三五三

が端的に示されている。(2)

さらにこの長崎貿易は、慶応二年八月から一年間だけで、藩は外國商人および長崎商人

は上表の通りであるが、軍艦・商船の大小合せて七隻の費用がその大部分を占めており、開成館政策のもつ政治的・軍事的性格



かう九五、二二七兩の借財をのこしてゐる二  
とが記されてゐる。<sup>(22)</sup>勸業・殖産兩局に於ける

経済政策だけでは、長崎貿易に於ける交方な

費用を捻出することゝができたのであ

る。長崎にあつた岩崎弥太郎は、「帝國許よ

り此迄何之産物も所積立に相成らず、月賦金

滞り、三月より来る二月迄縮大抵十八万兩

余り、それに何之手宛も無之、色々方略を

案じ、陽惣陰撫変化百出、一同精力を尽し、

漸く商會の形勢を張り持こたへ居申上へ慶



明治三十二年十二月二十五日、山崎正之進宛書状（と）國元へ書  
送つていた。<sup>(23)</sup>

(註) 貨殖局の吾出張所は、それぞれ土佐商  
会と通稱されている。

以上のべたように、開成館を中心にした政  
策は、かなり積極的なものであつたが、安政  
改革がそうであつたと同様に、この改革も、  
やはり自己矛盾<sup>（下）</sup>を落入うざるをえない。とり  
わけ商品流通の自由をもとめる農民層は、こ  
の勸業局にふける特産品の購買独占には強く



及対するであらうが、そうした農民の上層部  
分が土佐勤王党の影響を受けたことによつて、  
この可ぐれて経済主義的な及対が、きわめて  
直接的に政治的意図を内包するようになった  
ていつた。元治元年夏の土佐勤王党の起つぐ  
藩方への~~運動~~願の中の重要な項目の一つに藩営  
貿易及対があつたことは、先にみた通りであ  
る。藩は、この開成館の建設費用および運営  
資金を、國後普請として領内農民に賦課した  
のであるが、農民がほとんどそれに応じなかつた



つたため、この用成館を中心にした政策は、  
財政的に行詰つたこのことであるが、<sup>(24)</sup>このこ  
とにつりて依々不高行は、一民間には広屋・  
名主等も聊か智識ある者は、親も勤王論なれ  
ば、勤王の爲に心得は、いか程も出金で固旋  
すれ共、目的も無く商館等針葉し、夫が爲に  
は、すべて尽力せず不平而已相唱へ、師用金  
等も美泥みたりとのべていた。<sup>(25)</sup>ここには商  
品流通の自由を定める農民層の重商主義及対  
と、勤王愛の尊攘思想がうの及対とが混在



していったといわねばならない。  
しかも当時の全国的な状況は、先にみたよ  
うな「諸侯割拠」といわれる状況であり、少  
なくとも改革派の立場からは、国内統一の方  
途は全く立っていない有様であつた。従つて改革  
派の勢力にすれば、そのような状況がおめて  
起つたことでもなければ、あるいはまた好ま  
しい状況でもなかつた。彼らなりにそのよ  
うな状況に処する方途を立てねばならなか  
つた。先に引用した用成館創設にあつたこの



藩政府の布告にも、「天下輓近之勢、追々は  
各國獨立之勢にも可相至、右に依て邦土にも、  
右形勢彼是邦駢酌之<sup>上</sup>、富國強兵之所所置被  
遊、追々所蓄力之上は、朝暮之所爲邦尽力を  
も可被遊所趣意に付しと、のべうわているよ  
うにも、土佐藩における改革派的政権も、安  
政期とは異うた全國狀勢の中で、富國強兵を  
内容とする町割松田体制の確立を企図するよ  
うになつていた。

たかこの改革派政権も新しく模索はじめ



た曰、新税と体新への方角は、決して中固煥を  
即ちによつて提起された討幕理論としての曰  
新税論とは同一ではなかつた。それは先の  
藩政の布告が、「朝幕之所爲」の「蓄力」  
であるとのべているところからあきうかな  
ように、強烈として国内統一の方角として  
公武合作の路線から一歩も進んでいなか  
たうである。そのことに因して、他々不  
高行か、「薩海陸軍充實」に至ルコト、  
財ニ不富バ能ハズ、政ニ國產ヲ興シ  
四方ニ交易ヲ利ヲ



得ルコト今日ノ急務アリト、地力ヲ尽シ、商  
業ヲ以テ四方ニ交易スルコト勿論急務ナリ  
しかし、まかう「其（富國強兵策）引用者」ノ実行  
ヲ見ルハ、人心ヲ得ルコト急ナルハナシト  
の、慶応元年十二月藩庁に提出した開成館政  
策反対の意見書は、この開成館政策の問題点  
を端的に示している。この意見書は、「人心  
を得るためには、次のように続ける。」「天  
幕ノ下ニ彷徨致シ、此時ハ、人心愈々疑  
惑甚敷クナレバ、大義ノアル知ヲ以テ、國是  
師



一定ノ儀最急務ナリ、國是即一定ハバ、  
孰シモ方向相立チ、上下一途ニ相成レト。要  
するに公武合併論的立場を否定することガ、  
一人心ヲ得ることであり、そしてそのこと  
が曰割拠ト併利を確實なものとするであらう  
といふのである。こゝした然々木の見解は、  
先述した薩摩藩にみける西郷・大久保らの中  
心とする勢力の方向転換と相成するものであ  
つて、それが直ちに武力討幕路線の確定とは  
言えないにしても、從來の改革派の立場であ



つた公武合体論的路線から飛躍しつつあるニ  
とだけはあきらかであらう。しかしこのよう  
な依々木の見解は、彼が翌二年六月十九日、  
開成館政策のための市用金賦課に反対して、  
郡奉行兼考請奉行を罷免されたことかうもあ  
まうかなように、決して工依藩全体の方針に  
はあうまいものであつた。

このように後藤象二郎と藩庁主派が、依々  
木の見解にみられる方向が反いられなかつ  
たということは、開成館政策への反響も変服



する方向をもちえず、さうに混乱の状況に落  
 入るであらうことを意味した。慶応二年七月、  
 後鮮象ニ即は長崎に出張するのであるが、  
 の前に山内容堂にたいして次のように述べた  
 と回顧している。「最早此の如き状況に至り  
 ては爲すことなし。到底土佐一國を略して國  
 々に盡し、止むなくんは幕府と戦ひ、之を破  
 るまでは一國を燒土と爲すとも厭はざるべし。  
 然るに昨未だ致さず、其迄は船舶を買入れ、  
 南洋諸島を占領し、鐵工を増殖する」と。  
 (28)



の主要の藩片主流の混迷の端的に表明されて  
いよう。曰「討幕」の問題を考慮すれば、めづ  
つあつたか、一時を到るすべしであり、何ん  
う「爲すことなし」と祈えざるを得ない状態  
であつたのである。その頃ばかりに長戦で  
幕府倒れ奴化しつつあつた時であるにもか  
わらず、一「敢て肥後藩のごとく長藩再興に大  
祖するにもあらず、上國の風雲に對しては、  
寧ろ袖手傍觀の現状をば継続するに過ぎざり  
し」と、瑞山会編「維新土佐勤王史」が表現



するような有様であつた。いねは公武合体路  
線か、もはや完全に行詰つたことは認識しえ  
たのであるが、さりながら薩摩藩の如く創幕  
路線を破棄する方向に転進することもあつた。  
ない状態、これがまさに慶応二年の工化藩の  
立場であつた。にもかかわらず、何卒かの形  
での国内統一の必要だけは認識してゐたので  
ある。このような状態こそが、工化藩をして  
武力討幕路線にたなへて大政奉還運動を促し  
せしめた條件であつたといえよう。



註

この後編の長崎行について「依々不高  
行日記」は、「後編は依々開港論にて、  
容堂公の師愛臣の得共、一般勸王論盛に  
相成、政府の望無之、依之長崎に行き、  
大に商法を藩政にて誠になさんとて也、  
且一時利害を避けるに相成たりとの  
べていゝる。すなわち藩政貿易の推進と、  
藩内における彼らの政治路線に云いする  
る所のゆきかう逃みするためのものであ  
つた。開成館政策の行詰りが始末に示す



4  
2  
11  
2  
2  
0

## 二、長州藩の動向

——武力討幕路線の基礎——

土佐藩は、元治元年七月の四野根山屯集に  
巨陣をしかけ、その改革を進めた。だが長  
州藩においては、同年十二月からはいよいよ  
内訌にみける尊攘派の勝利、すなわちその藩  
政の掌握が改革にはまわっている。このこ  
とには、長州藩にみける慶応期の藩改革、他  
の藩派のあるいは何れかの時期の改革とも平  
然に闘ったものとなることを示しているよう。



この長が藩の慶応の改革について、田中  
彰のすぐれた研究があるもので、それによりな  
がら、土佐藩と中心にした大政奉還路線と対  
立した、長が藩における勢力調整路線の基礎  
を分析していこう。

慶応元年五月二十八日、本戸春久が討幕派  
指導者を中心とする藩政新派、一元永三木へ

清末・徳山・長谷の三支藩（引用者）岩國へ支藩（引

用者）并一内其外大臣之者とも、要衝之地へ分

配被仰付置は、是の諒思召被爲在し仰り



にハル、年月相隔り、所深首と不奉察、今日  
之危急に臨みても因循に打過、実備不相調  
向も有之哉に相圖ハ、当今國家危急之場合に  
立至リハにねてハ、一、二カハ防長二國一引用  
通一致之軍制相調合シと布告した。支那藩。  
皇臣の知行地と分れる支那領部の分取の状況  
也、一、二カハ一致シの集取の領部に再編成する  
こと、しかもそれハ西洋陣法による軍制  
の統一をもつて實現しようといふのである。<sup>(32)</sup>  
これは五月十五日吹山口に帰つてきた不戸孝



久の意見によるものであつて、<sup>(33)</sup>長州尊攘派の

可割秘論の具体化でもあつた。<sup>(註)</sup>

(註) 吉村本戸孝文は、長久澤を「肅然深夜

の如し、寂き依創に固めることを、常に主

張してゐたことである。<sup>(34)</sup>

こうした方向は、まさに藩依創を、従来の

幕藩依創の秩序から新しい依創へ再編成する

ことであつたといふよう。大村益次郎の次の

ような軍制改革案は、その方向をもつとも異

型のものに物悟つてゐた。「四境に幕府の大敵を



引受けることにならば、今日までの諸隊や母  
禄の士族隊ぐうぬでは、到底抵抗できない故、  
この際農民・町人から募集して兵役の任に就  
かしめることが必要である。可なり防長ニ  
かか出る覚悟でなくてはならぬし、その母禄  
の士は当然志召の義務はあるが、農民・町人  
は職業を抛つて志召する場合の給子即由題で  
あり、もろろんこれは藩政体が負担すべきで  
ある。農民・町人はこれを青年より採用する  
が、徒らに烏合の衆を集めたのでは戦時に役



またないかう、あうかじめ岳が訓練を行な  
要がある。これを改行するのは急務である  
というのである。(34) この大村の具解では、農  
業を食んだ「諸隊」と「士族隊」とが、あ  
りはまた「女祿の士」と「農民・町人」とが、  
幕府への抵抗という視角かう、同一次元にあ  
いて組織されたようにしている。もはや「農  
民」に出る、幕府保衛的軍の組織の補充部分  
として、工役農政事業に政権に組織された民  
衆と農家に異なつた方向をもつて、「農民・



町人への組織されようとしている。こうして  
再編成されてくる藩領新は、幕藩領新の諸身  
分への分裂を前提とした体制ではなくて、一  
國中一國の正義と相成。一致協力（五月三十一  
日、防長士民への布告）といわれているように  
幕藩領新の身分秩序のりこえを統一させた  
体制であった。

当時の長門藩にあった軍隊は、(一)「干城隊」  
その他の永田國の隊、(二)尊攘派諸藩に組織  
された「奇兵隊」などの諸隊、(三)農民・町人



なにか自発的に組織した「維新」の  
農・商層の隊の三種数に分れるが、<sup>(36)</sup>これの  
多くの軍隊は、全て新しい落取力の下に統一  
的に組織される方向に再編成されていつた。  
その際重要なことは、「干城隊」が基幹とし  
て編成されたことである。<sup>(37)</sup>この「干城隊」と  
は、内戦の際に、中立派として内戦終息のた  
めに登場した「鎮静会」の家臣によつて、  
「精銳の士」と相並び、往々宿隊の上に立ち、  
折衝禦侮と相努む、且つ総司令部之模範



とも相成ひ取建、干城隊再興被仰付奉存  
しといわれ、この組織である。<sup>(39)</sup>高杉晋作も、  
「比度干城隊振興に相成ひ着、大幸之至に也、  
早々干城隊総督英氣之士師道に相成、諸隊の  
規律・法度も干城隊より初まり、諸隊の指揮  
号令も干城隊総督政村より請けし（度志元年、  
前原一誠宛書状）とのべいた。<sup>(40)</sup>

他方農・商層の隊にたいしても、対外・対  
幕戦を契機に自発的に組織されてきた、全く  
新しい性格をもつた、時と場合によればブル



ジョワ革命の主力部隊とも成りかねた。この軍隊にたいしても、藩閥の下にわけられ、勢力な統一を企図した。定員を定め、有志者の私的な団体を抑制し、まづに訓練の体制を固めていったのである。田中の引用した例によると、内戦の際に尊攘派の軍事的・経済的基盤となつた瀬戸内地方の中部において、佐分利農民が、農兵隊組織にのりこめたのにたいして、藩は「此等軍制を取らば仰々、藩部一統之原理則は我邦の是、無余儀也」云々、



不被美見いし（慶応元年八月二十一日）と、その装  
束隊組織を許さなかつたのである。<sup>(22)</sup>

また一般家庭については、「昔年來八手分  
配被仰付置、既に攘夷所手印以來、妄曲甚  
外一手新出張之節、老若混交種々難題起り、  
馳引手煩ひのみにて、一級防戦無覺束、甚害  
不待辨して明かある所にいゝ……八手五分は、  
有名無実の所手組に相当、且又其新所取る銃  
砲一般の所備主被仰付い、就ては敵兵人の司  
令所引支も有之、其外諸役人の儀も不拘勤功、



屹と人形部登席可被る成部には、……畢竟  
八手の即利交は、刀槍接戦の即手組にて、至  
今銃砲の戦闘にては有損て無益、新害得矢、  
前後瞭然たる事にな、何後一手別の即分配被  
美上、夫れで八組合併被仰は、大番所即番節  
をも被美止可然し（慶志元年七月十一日）とい  
うのである。<sup>(43)</sup>これは従来の軍部編成であつた  
番組と被を中心にした軍部編成と、新しい状  
勢にあつて完全に否定することにあつた。そ  
してこれは、一従来即手組・大組・五組・弓



「弓隊」引用者。鉄（鉄砲隊）引用者。と方か  
れていた足輕と、「中隊に組立」と、すなわ  
ち従来の「ばうばう」の足輕組織と、統一な組  
織に再編成した方針と呼ぶ可るものであつた。  
「赤」の道路方、一隊同様には補作はしては、  
火器利用無之故は不及申しと、各支隊別で  
規律・訓練がばうばうであるような状態では、  
「火器」を使用できる軍隊の編成ができたか  
つたところ、足輕以下の格層の再編成を  
促す原因があつたのである。



又上のべたように、この軍制改革において  
は、次の三點が重要であらう。第一には、幕  
藩制的な家臣団の軍制編成を完全に否定し  
たことであり、第二は、輕格層あるいは農工商  
層をも含めて、完全に統一の近代化の軍制  
編成に組織されたことであり、そして第三に  
は、これを基としてそれは近代化の市民の軍隊と  
して編成されたのではなく、まず城下町を基  
幹としておこしているように、幕藩制の近代化  
の、封建的な藩政の下に藩方に統制されて



いたといふことである。われわれはこのよう  
に軍を編成すること、封建的分権制を王権の  
下に中央集権化した絶対主義法新下の軍を編  
成の雛形であるとするべきであろう。この  
ような長が四藩の中にあつた体制こそが、大  
新政令であり「萬世の新政」といわれうる所  
新であつて、これを前提とした全国統一は  
その、まさしく明治維新であつたといえよう。  
このような改革をなしとけ、長が四藩の中  
の指導者こそが、明治維新後の新政権下にあり



「絶対主義官僚」に成長しうる資格をもつ  
に看做といえるであらう。

「江戸は如師承知、大名も自分領丈の百姓  
をせりまゝ、女と酒と偷あまのみに日を送り、  
天地の累卵よりも危は他のもののみ相心得、  
西国のものは何事も知うぬ教に而生を偷み、甚  
家来は々々々、其侯は々々、何れの日か青天  
を望みしる出来申し哉、実に悲愴に不堪也」  
（慶応二年八月二十日は、渡辺昇菴書状）という木  
戸孝父の意識こそ、「自分領丈の百姓をせり



立するのではない、統一國家の支配者たるう  
とする意識であるといえるのである。

これが全國的な中央集権制の確立は、軍事  
力だけで行われるものではない。それは國內  
市場をすでに成立させている當時の日本の経  
済の發展段階を、いかに処理するかにもかか  
つていゝ。いかにえるたうば、二三部を中  
心にした商品経済にたいする幕府の主要権を、  
このようにして転覆させるかにある。彼ら  
意識のあるのは無意識のうちに指向してい  
る統一



の下にありて、商品経済の全国市場と、  
よう形にありて統一の掌握するかと、  
た問題をそこにはある。この長に達しても、  
彼らは方向にけはあまうかに確定していたと  
いえよう。

「五ヶ年」中の防長の腹を推して大細工を  
仕出すねば、大刷新は成就しない。むしろは、  
是を引用した高杉晋作の言葉であるが、彼等は  
この言葉の前に、「素因も我断然不令愧因  
侮やう用港すべし、不然は幕・薩は不及申、



遂には外舞臺の妖術に陥るやうなことをいう下  
関開港論のありた。この下関開港論のもつ意  
味はきわめて重要である、坂本竜馬の国策に  
よつて慶応二年十一月創立された薩長合衆の  
同人社の「示談箇條書」にありて、「馬関  
通船之條」は、何品ヲ論セス、上下共ニ可成美  
止メ、警へ不美通ル而不叶船ト云ヘト云、改  
不相所趣ヲ以テ、可成引上置ル條、同人社之  
最緊要ナル眼目ニ  
ハルと主張されて  
いる。<sup>(45)</sup>  
まさしく下関は、西事日本のみならず北陸地



方をも含めた地帯と、天下の台所である  
大阪とを結ぶ幹線であつた。その下関を柳  
久、これを開港するといふことは、田中の表  
現によれば、明うかに大阪を頭ととし、そ  
こに集中していた幕府の全国市場支配の交易  
路線の切斷を意味するものであつた。

當時幕府は、「福色会所取建方」について  
の断奉行以下の建言（慶応元年十一月）に、「利  
权を上に歸掌握無之とは、逆も行か不申、其  
利权を上に歸掌握被成外には、産物会所取建



と外有と固執しとあるように、先述の如く政期  
以来の重商主義的な商品経済の掌握の方向を  
依然として堅持していた。下関開港論と薩長  
合葬の曰商社設置は、全くこの幕府の方向  
に、同じ重商主義の立場から異なる面に対立す  
るものであつたといえよう。だがこのことは  
薩長が藩主権とするこの国内市場統一の方  
向に、本質的には幕府の場合と同質のもので  
あることを示すものである。そしてこのこと  
は、幕藩体制の下における商業資本の、新政府



の下で、新たな飛躍が可能とした条件である  
と同時に、明治維新の近代主義様式の展開  
に伴う経済的自由主義への要請がう展開され  
たものでないことを示すものであつた。

以上のべた長身藩に及ける慶応期の藩改革  
は、明治政府の下に及ける中央集権的な体制を  
意識的に、長身藩を単位として見事に実現し  
たものであつたといわなければならぬ。武  
力討幕路線の基礎は、まさにここに確立した  
とみることのできるのである。



① 平尾道雄著 曰子爵谷子城伝 占・八五頁。

② 大町桂月著 曰伯爵後藤象二郎伝 占・一三

五頁。

③ 寺石正路著 曰南學史 占・一一二六頁。

④ 吸崎斌著 曰鯨海醉侯 占・二二四頁。

⑤ 曰勸王研史 佚々不夫侯昔日談 占・三〇〇頁。

⑥ 大町希揚著・一三五頁。吸崎希揚著・二

二三頁。

⑦ 曰武市瑞山園傳文書 占(一)・四九八頁。



⑧ 予屋道雄著 日維新經濟史の研究 四頁。

⑨ 同前。

⑩ 同前，五頁。

⑪ 大町希揚書，一四三頁。

⑫ 坂崎斌希揚書，二三五頁。

⑬ 山谷干城遺稿 山 (下)，一一頁。

⑭ 同 依 不 詮 正，三一九頁。

⑮ 坂崎斌希揚書，二三四頁。

⑯ 予屋道雄稿「貨殖局大坂出張所」(土佐

史記五六号・六四頁)。

①⑦ 平尾道雄稿 1 高知藩陸軍叢誌 1 (土佐史

誌 三三號・八六頁。

①⑧ 平尾前獨書。

①⑨ 坂崎前獨書・二三九頁。

②⑩ 平尾前獨書・五頁。

②⑪ 1 山崎直之進手録 1 | 平尾道雄稿 1 土

佐商會始末 1 (未定稿) 所収。

②⑫ 1 佐々木高行日記 1 | 平尾前獨稿所収。

②⑬ 平尾前獨稿。

②⑭ 大町前獨書・一四四頁。坂崎前獨書・二



三七頁。可依々不誌也。三一八・三四五

頁。

②⑤ 一依々不高行日記——稿本曰豊範公記也。

②⑥ 可依々不誌也。三二一頁。

②⑦ 同前。三三五頁。

②⑧ 一後錄伯子蹟訪同録——曰史詮星記録也。

②⑨ 瑞山会編曰維新工依勤王史也。九一六頁。

③⑩ 稿本曰豊範公記也。

③⑪ 田中彰稿「長州藩に於ける慶応軍政改革」

一史料四二卷一號。一幕末薩長交易の



の研究 (史學雜誌 六九卷三、四号)。

③③ 修訂 国防長回天史 占 (九) ・ 一六四頁。

③③ ・ ③④ 同前 (七) ・ 一五四頁。

③⑤ 大石益次郎先生伝記刊行会 国防益次郎 占

三九四頁。

③⑥ 修訂 国防長回天史 占 (七) ・ 一六二頁。

③⑦ 田中芳雄稿 (史料) 一一〇頁。

③⑧ 同前 一一二頁以下。

③⑨ 芳雄 国防天史 占 (九) ・ 六四三頁。

④⑩ 田中芳雄先生遺文 占 ・ 一六〇頁。



④ 田中前稿 (史料) ・ 一一九頁。

⑤ 同前。

⑥ 前稿 田中史 四 (九) ・ 一八七頁。

⑦ 同前 (九) ・ 一八三頁。

⑧ 田中孝父 文書 四 (二) ・ 二二五頁。

⑨ 田中龍馬 文書 四 (二) ・ 四一頁。

⑩ 田中前稿 (史料雜誌) ・ 四号 (四) 八頁。

⑪ 田中前稿 (史料雜誌) ・ 四号 (四) 八頁。

頁。



### 第三節

明治維新への二つの道

#### 一、大政奉還運動

——連邦國家への道——

土佐藩の主流が、慶応二年にみせた混乱を  
切抜けるために、第一に取りかかったのは倒  
幕派の動向をあきうかにすることであった。  
慶応二年八月二日佐々木高行は、中國・四  
國・九州の探索を命ぜられた。しかしそれは  
表面上のことであつて、  
「其实ハ大宰府へ罷  
越ハ御内達也」と自うのべているように、当



時大宰府にあった三條実美の下に訪れ、反幕  
勢力の動向を調査することになった。①しかも  
この時同行した者の中には、中山左衛士のこ  
とく新おこぜ組に属する士分の者もおれは、  
島村寿太郎のことく郷士であつて、武市瑞山  
の義弟でもあり中心的勤王黨員の一人であつ  
た者もあつた。このように「潛越非分の拳動」  
ありときめつけたいた勤王黨員を登用して、  
反幕運動の実情を探らせるところまで、山内  
容堂・後藤象二郎を変らせたものは何か。



彼らが「袖手傍觀」してゐた第二次征長戦に  
おいて、幕府は惨めな敗北を喫しその權威は  
全く地に落ちてしまつた。「鬼も角六月頃か  
らは」(すなはち)二次征長戦後——引用者)、天下の  
大勢に制せられて、佐幕家の旗風が頗る面白  
くないといわれる状態になつてゐたからで  
あろう。(2)

谷干城は、慶応二年の幕(幕)から三年にかけて  
長崎にあつた後藤象二郎に会い、「討幕先に  
すべく攘夷後にすへし」との説を聞き、初て攘



其の不可を感じたり、……其説富國強兵を  
以て尊王の要素とす、其の勢實に可驚ものあ  
りし（隈山詒謀録）と後藤の見解を記してい  
る。<sup>③</sup>すなわち土佐藩政の主導者であつた後藤  
象二郎が、慶応二年の暮には公武合体論的立  
場から倒幕へと転回してゐたことはあきらか  
である。しかしこの「倒幕」の内實に關して  
は、当事者である後藤自身にもまだ不明確な  
ものであつたろう。それが内亂をも辞さない  
武力討幕へ展開する方向をもつものなりか、



あるいは列侯會議を内容とする公議政体論的  
な大政奉還の路線であるのかについて、ま  
だ不明確なまゝであつたと思われる。

この二つの幕藩体制克服の道、すなわち明  
治維新への二つの道は、本質的には全く相容  
れない相対立する路線であつたといわねばな  
らない。武力討幕の道が、單純に尊攘運動の  
延長でなかつたことは、先述の「割拠論」の  
問題からあきらかであらう。従つて「草莽」  
層の主導性は、完全に否定されてゐたのであ



るが、だがそこには曰内亂も辞さない自信があつた。この自信は、尊攘派から討幕派への飛躍をかう得たことによるものであり、さらに幕藩体制的諸体制を克服して單一不可分の統一國家形成への方向を確定したことに  
によるものであらう。

ところがこれにたいして大政奉還の道は、公武合体運動の單なる延長ではなく、少なくとも幕政否定の方向は明示していた。だがそれは武力討幕と徳川幕府との間の妥協の產物



にしかずなかつたのである。いうまでもな  
く大政奉還は、幕政を返上し、徳川家を一諸  
侯たらしめ、將軍を列侯會議の議長たらしめ  
ようとする方策であつた。そこでは幕府は否  
定されても、徳川家は存続するのである。そ  
してこのことは、幕府は否定されても諸藩は  
そのまゝ存続し、天皇政權あるいは列侯會議  
の下で従来の体制を維持するいわば連邦國家  
的な体制が、企図されていたことを示してい  
る。このように幕藩領主の地位を維持し、同



時に幕藩領主同志の内亂を避けるための妥協  
的な方針が大政奉還の道であったといえよう。  
改革派的勢力にとつてみれば、この方針はき  
わめて当然のことであつたといわねばならな  
い。元治元年頃から方向転換を示しはじめた  
薩摩藩の場合も、慶応三年五月の四侯会議が  
失敗に終るまでは、この方針をとつてゐたの  
である。薩摩藩の指導者の一人であつた小松  
帶刀が、慶応三年一月イギリス公使館員アー  
ネスト・サトラに、倒幕ということの内容が



「幕府の権力乱用を防ぐに過ぎない」ものであり、同時に「天皇が日本の実際上の統治者に復帰すること」を望んでいるのだとのべていたことは、この間の事情をもっとも端的に示すものであろう。(4)

(註) 大久保・西郷・岩倉具視らの計画で、

島津久光・松平慶永・山内豊信・伊達宗

城の四侯を京都に会同させ、兵庫開港・

長州処分問題を中心にして、政局の主導

権を幕府から奪おうとした。そこで企図



されてゐたのが、天皇の下における雄藩  
連合政権であつたことは、よく知られて  
ゐる通りである。

以上のような大政奉還論が、土佐藩の藩論  
となつていくのは、いゝまでもなく後藤象二  
郎と坂本竜馬の出会いによつた。坂本竜馬は  
先にもつてたように、その開明的性格と商人  
出身であるという点から、全國統一の内容に  
ついての方途を、中岡にみられたように、す  
ぐれて「刺客」の立場からは考えず、幕藩体



制的分権制の克服をかなり安易に考えていた  
ようである。<sup>註</sup>このような坂本であつたからこ  
と、かつての勤王党弾圧の張本人であつた後  
藤象二郎を、初対面で「土佐國中で外ニハあ  
るまい」人物であるとまで評価するやであろ  
う。慶応三年十月十三日彼は後藤に与えた書  
状の中で「幕中の人情に不被行もの一個條有  
之ハ、其議<sup>儀</sup>は江戸の銀座を京師にうつしは事  
なり、此一個條さへ被行ハ得ハかへりて將軍  
取は其ままにても名ありて実なければ恐るる



に足らずと奉存せしとやべてりた<sup>⑤</sup>。ここに坂  
本の國家的統一についての考え方が象徴的に  
示されていよう。

こうして慶応三年六月上旬、長崎から上京  
の船中で、坂本は後藤に有名な「舟中八策」<sup>(註)</sup>

を提議するやである。ここでは「天下ノ政權

ヲ朝廷ニ奉還せしめ、政令宜しく朝廷ヨリ出

すべき事」とあるように<sup>⑥</sup>、幕政の否定はあき

らかであるが、幕府は徳川家の処置について

は勿論何もおれられていない。ところがこれ



か、六月十五日在京重役の合議によつて藩論  
と決定し、ついでこれを薩摩藩へも申入れ七  
月一日同意の返事をもらつてゐるのであるが、  
その「薩土盟約」においては、將取に居て  
政柄を執る、天地間有る可からざるの理なり、  
宜く候列に歸し、翼戴を主とすへしとのべ  
られていた。<sup>⑦</sup>要するにこの大政奉還は、幕政  
返上であり、徳川家をも含めた列侯合議体制  
への推転を意味するものであつた。谷干城の  
表現にしたがへば、「故吉田派へ新おこせ組



——引用者——の一部、即後藤等は復古論に同意すると共に、又徳川を推尊す、当時後藤の眞意を推測するに、口舌を以徳川に政權を奉還せしめ、慶喜を政府の首座に置き、復古の名の下に、依然徳川に政權を托し、一方には薩・長初め復古論を慰め、一方には徳川譜代の諸侯の不平を慰めんとす、其智略巧なりと雖も、斃て後已んと期せし復古論者の深く痛にする処也<sup>⑧</sup>といふのであつた。しかも後藤は、大政返上後の將軍を関白にすることを考



えていたとのことである<sup>⑨</sup>。この大政奉還論を  
坂本竜馬によつて教えられた後藤象二郎ら土  
佐藩主流は、恐らく慶応二年以来の混乱から  
逃れられる唯一の道を見出した思いがしたて  
あろう。

(註)

### 新政府綱領八策

一 天下ノ政權ヲ朝廷ニ奉還セシメ政令宜  
シク朝廷ヨリ出ツヘキ事

一 上下議政局ヲ設ケ議員ヲ置キテ萬機ヲ  
參贊セシメ萬機宜シク公議ニ決スヘキ



事

一 人材ノ公卿諸侯及天下ノ人材ヲ顧問ニ

備ヘ官爵ヲ賜ヒ宜シク從來有名無実ノ

官ヲ除クヘキ事

一 外國ノ交際広ク公議ヲ採リ新ニ至当ノ

規約ヲ立ツヘキ事

一 古來ノ律令ヲ折衷シ新ニ至当ノ規約ヲ

立ツヘキ事

一 海軍宜ク拡張スヘキ事

一 御親兵ヲ置キ帝都ヲ守衛セシムヘキ事

一金銀物貨宜シク外國ト平均ノ法ヲ設ケ  
ヘキ事

以上八策ハ方今天下ノ形勢ヲ察シ之ヲ  
宇内萬國ニ徴スルニ之ヲ捨テ、他ニ濟  
時ノ急務アルヘシ苟モ此數策ヲ斷行セ  
ハ皇運ヲ挽回シ國勢ヲ擴張シ萬國ト並  
立スルモ亦敢テ難シトセヌ伏テ願クハ  
公明正大ノ道理ニ基キ一大英斷ヲ以テ  
天下ト更始一新セン

當時土佐藩主流は、公武合体論ヲ行われ加



たいことを認識し、倒幕の止むをえないことを考へはじめつつあつたことは先述の通りである。四侯会議のために上京することになつた山内容堂は、四月二十七日高知出發に際して、「我等爲皇國致上京、於兵庫外馬ノ開港期限延及応接、若不致承服時は、及戦争は之付而者、討東幕、是亦及戦争は事も難計」と家老中に宛てて言へてゐる。<sup>(10)</sup> 容堂までもが倒幕戦争の計りがたひたことを意識しはじめていたのである。もちろん容堂は、四侯會議にお



いゝ薩摩藩の幕府を否定した雄藩連合的路線  
にも同調しえなかつたのであり、もちろん武  
力討幕の方針には到底同ずることはできな  
かつた。後藤も、ソモ／＼大藩ノ（任）タルヤ、  
皇國危急存亡ノ時ニ當テハ、天地間ノ大條理  
ヲ以テ外國ニ対スルヲ急務トス、何ソヤ禍害  
ヲ肅清ノ中ニホメテ私闘ヲ爲シ、外夷ノ紛中  
ニオカ入ルヘケンヤ、今薩ヲ説クニ大條理ヲ  
以テセンニ聞カサル事不可有、聞ク時ハ俱ニ  
カヲ戮シテ皇國ヲ救ハン、不聞時ハ絶行シテ



可也。一、寺村左膳手記。五月十八日、案。と薩長兩藩の武力討幕路線に反対の意向をあらわす。かに示してゐた。彼ら倒幕は幕政否定にのみ切りなからず、武力討幕にはのみ切れなかつた。何故か。寺村左膳手記には、一、薩＝説く略＝曰として、一、今ノ時当テハ眞ノ叡慮ヨリ不出ンバ、私闘ノ責不道ナリ、幕府ハ不可恐、万世ノ公論不恐ニハ不可有、且夷狄ノ大患眼前ニアリ、實ニ危急存亡ノ秋也、今中皇國中一心戮力、至当ノ公論ヲ以テ



万世ノ基本ヲ可立ノ時至レリ、然ルニ一度兵  
ヲ京地ニ動カス時ハ、皇國忽瓦解倒乱、外表  
ノ術中ニ入ン、是皇國ノ爲ニ不取所也」とり  
ベテいる。あきうかに彼らは、「私闘」たる  
ことを恐れるよりも、内乱による「瓦解倒乱」  
を恐れてゐたといわねばならない。この「瓦  
解倒乱」とは、幕藩体制的支配体系が根底か  
らくつかへされること、いわば百姓一揆への  
恐怖感を意味するであらう。彼らが倒幕にふ  
み切つたにしても、幕藩体制的秩序全体を否



定してゐなかつた。農民層との階級的対立は  
当時益々深刻となり、第二次征長戦の時、出  
兵拒否の理由にそれが用ゐられてゐたことは  
よく知られてゐる通りである。いわば対幕戦  
に於いて農民層を組織し、あるいはこれに支  
持される自信がないことが、互解倒れとの  
恐怖心を生みだす根源であつた。ここに土佐  
藩主流が武力討幕にのみ切りえない根本理由  
があつたといえよう。

四 舟中八策

は、まさにながやうな事情の



ところへ提起されたのである。この大政奉還  
路線において、武力討幕すなわち危険な内訌  
に訴えることなく、至当の公論ヲ以テ万民  
ノ基本<sup>上</sup>が立てられると判断したのである。  
伊達宗城によれば、この時後藤は、「全体今  
日の形勢、兵庫の開港とか、長崎の御処置と  
か、五卿帰洛とかいふ事は、誠に枝葉の論に  
て、其様な事はどうでも善し、夫よりも西洋  
各國に對して恥かしくない様、皇國の御政体  
に大變革を遊ばされたしと、頻りに代議政体



へ列侯會議論を意味する——引用者」を論じ  
ていたとのことである<sup>(12)</sup>。具体的な方策を把握  
した後藤が有頂天な状況が想像されよう。  
こうして土佐藩は大政奉還運動を推進してい  
くのであった。<sup>(註)</sup>

(註) なお、伊達宗城はこのような土佐藩の  
大政奉還論の推進を、「土州藩の今迄の  
不評判を換したいといふ謀計」であると  
見ていた。<sup>(13)</sup> もちろんことなから土佐藩  
の大政奉還運動には薩・長両藩への対抗



意識があつたのである。

ところがこの土佐藩の藩論としての大政奉

還論は、これを提起した坂本竜馬の立場とは

かなり異つてゐた。この大政奉還論が土佐藩

の藩論として取上げられた時、土佐藩主流は、

幕府にたいする武力行使を全く退けてしまつ

た。山内容堂は、「大政返上の周施するに、

兵を擁するは脅喝手段で不本意千万であるし

として、出兵を拒否してしまつたのである。(14)

それに比べて坂本は、九月に薩摩藩から借金



して一三〇〇挺の小銃を購入し、<sup>(15)</sup> さらに木戸  
孝允に「上國之論ハ先生ニ御直ニウカカヒ  
得ハ、ハタレテ小弟之愚論モ同一カトモ奉存  
レト、その武力討幕方針に同調していたの  
である。<sup>(16)</sup> 要するに坂本は大政奉還論を主張し  
ながらも、他方幕府にたいする武力行使をも  
辞さない態度を堅持していたのであるが、こ  
れが土佐藩主流に受けいれられた時には、ま  
さに武力行使を避ける手段として受けいれら  
れたのであった。まさに土佐藩主導の大政奉



還論は、幕府内部において考えられていた幕府中心の国内統一の方向と、薩・長を中心にした武力討幕の方向との妥協策として提起されたものであるといえよう。このように大政奉還論が妥協の理論であつたということは、とりもなおさず、新しい体制において少なくとも幕藩体制がそのまま温存されることを意味するであらう。全て問題は幕藩領主相互間の問題として処理され、彼らの地位が本質的には変らない方向のみかえられるであらう。こ



れこそ列藩會議の体制であり、それは決して  
單一不可分の統一國家への道でなく、各藩の  
相對的獨立を一定前提とした國家的統一、い  
わば連邦國家の方向であるといわねばならな

い  
〇

二、武力討幕運動

——統一國家への道——

「柳皇國ハ五畿七道ニ区分セラルルコト年  
既ニ久シ、施政ノ制度、上古ハ措テ論セス、  
鎌倉開府以來武門其領土ヲ守リ、各其施政ヲ  
異ニスルヲ以テ、今遽ニ之ヲ一定セント欲ス  
ルハ容易ノ業ニ非ズ、然レトモ之ヲ一定スル  
ニ非ラサレハ、則皇威ヲ宇内ニ宣揚ス可キノ  
大基本ヲ立ツルコト能ハサルナリ」<sup>(17)</sup>。これは  
京都にあつて、倒幕運動を総括していた岩倉



具視が、慶応三年三月、攝政二條齊敬に提出  
した意見書の一節である。この意見は、封建  
的分権体制を否定して、単一不可分の統一國  
家形成への要求であると理解しても、あなが  
ち索強附会ではないであらう。われわれはこ  
の岩倉の主張に、先にみた長州藩の慶応期の  
改革に実現された、いわば絶対主義的統一的  
体制を、全国的に拡大しようとする主張であ  
るとみることが出来る。この「各其施政ヲ異  
ニスル」という各藩割拠の体制を、一定し



することこそが、明治維新が実際に果したも  
つとも重要な任務であつたといえよう。  
もちろん武力討幕といふことと、軍一不可  
分の統一國家形成といふ問題とは、直ちに同  
一であるというわけでは決してない。木戸孝  
允は廢藩置縣の方向が確定した頃、十余三年  
前大勢を察し、七百年封建之體を一破し、郡  
縣の名を与へ、往々天下の力を一にし、天下  
の人材を養育せんと欲し、百方苦心、同志中  
数名に談じ、快諾するもの一人に遇せず、止



むを得ず術を用ひ策を施し、種々説破、先づ  
旧幕の朱印の列を廃し、朝廷へ封土を返上し、  
許不許は只朝命に随ひ、大に名分を正すべし  
と、依て漸く薩大久保等、これに応じ、終に版  
籍返上の筭に至る（明治四年七月七日付）  
と回顧してゐる。<sup>(18)</sup>この木戸の回顧は、討幕が  
直ちに統一國家の實現に轉化することと意識  
してゐたのは、ほとんど木戸一人だけであつ  
たことを示してゐる。だが右に引用した岩倉  
の意見には、木戸と同様の方向が示されてお



り、しかもこれは大久保利通や西郷隆盛らにも見せたところとびある。また先に問題にした『割拠論』は、それが統一國家形成の具体的方途までにはあきらかにしていなかったにしても、その『割拠』はあくまでも『統一』への前提として考えられていたものであった。従つてここにも討幕は直ちに國家的統一に転化しうる条件をもつていたとみるべきであらう。しかもその『割拠論』の具体化が、長州藩の慶応改革にあつたことは、國家的統一の具体



化が、幕藩領土の立場を前提にした雄藩連合  
的あるいは連邦國家的内容を持ったものでな  
いことを示していよう。しかしこうした方向  
を確認できるのは、やはり討幕派の指導層に  
限られなければならないであろう。

さらに、ここで注意しなければならないのは、  
この武力討幕さうには國家的統一のための組  
織が、全国的に横断的な組織たりえないとい  
うことである。あくまでも「藩」体制自体が、  
武力討幕の組織たるべき性格を、  
「割拠論」



かもつていたことである。そしてこのことは、  
割拠論自体の性格、さらにいえば割拠  
論しか提起しえない討幕派指導層の封建的  
性格に基づくといわねばならない。従つてこ  
の武力討幕の路線が、大政奉還運動の場合と  
同様に、雄藩連合的な組織形態をとる傾向に  
あつたのである。曰藩という幕藩体制的な  
機構自体が、幕藩体制自体を否定する組織の  
基幹とならざるをえないのであつた。

土佐藩における武力討幕派の組織に当つた



中岡慎太郎が、たえずこの薩藩を主導しよう  
る身分にある層を中心に組織することに努め  
た理由はそこにあつたといえよう。彼は、慶  
応三年五月、江戸にあつた板垣退助に入京を  
促し<sup>(19)</sup>、板垣を中心に土佐藩武力討幕派の結集  
をはかると共に、五月二十六日薩摩藩士と会  
同して武力討幕のための「薩土密約」を結ぶ  
のである。<sup>(20)</sup> この間の事情を谷干城は、先述の  
大政奉還論に従つた藩主流による「薩土盟約」  
を信用できないとして、「於是別に有志者盟



約の必要あり、即ち石川清之助（中岡の変名）  
——引用者——の周旋にて小松帶刀の寓に会し、  
嚴約を結ぶ、薩人は小松帶刀・西郷隆盛・吉  
井幸助の三人、土佐は石川・乾（板垣退助）  
——引用者——・毛利（恭助）——引用者——及余の  
四人なり。とやてい<sup>(21)</sup>る。さらに中岡は、在  
藩の大目付本山只一郎に宛てて、容堂の「再  
度上京も可然、は得共、是よりは忽ち天下の大  
戦と相成、儀明々たる事」であるから、「御  
議論周旋而已」であるなうは、「御上京不被



爲遊方宜様相考<sup>ル</sup> 之<sup>レ</sup>と<sup>リ</sup>ハ、<sup>フ</sup>リ<sup>ニ</sup>テ若<sup>シ</sup>、  
明君英断先<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>敵に臨<sup>マン</sup>と<sup>リ</sup>御召<sup>ス</sup>之<sup>ノ</sup>事な  
れハ、――何<sup>レ</sup>の異論も可<sup>レ</sup>申上<sup>セ</sup>哉、只<sup>ニ</sup>只<sup>ニ</sup>敬服之<sup>ニ</sup>  
次<sup>ニ</sup>也<sup>ニ</sup>と、<sup>テ</sup>孝藩武力討幕を訴<sup>エ</sup>て<sup>ハ</sup>いた<sup>ス</sup>。  
こ<sup>う</sup>し<sup>た</sup>層<sup>ノ</sup>の武力討幕派へ<sup>ノ</sup>参加は、武力  
討幕路線に<sup>ハ</sup>汎<sup>ル</sup>層を組織する可能性を<sup>与</sup>え  
た<sup>ガ</sup>、彼<sup>ラ</sup>は、必<sup>ズ</sup>しも討幕と國家的統一と  
を同義と考<sup>エ</sup>る意識を持<sup>ツ</sup>には至<sup>ツ</sup>て<sup>ハ</sup>い<sup>な</sup>か  
つ<sup>た</sup>。板垣退助<sup>ガ</sup>「公、今<sup>ニ</sup>して決<sup>セ</sup>られ<sup>ス</sup>」  
ん<sup>ハ</sup>、他<sup>日</sup>或<sup>ハ</sup>は御馬を島津・毛利両家<sup>ノ</sup>門<sup>ニ</sup>



敷かれんも知れず<sup>(23)</sup>と山内容堂に訴えてゐる  
ようにあるいはまた谷干城が、「若他日、  
薩長力を合せ大事を成しけ節は、忽ち怨を受  
可申と、實に爲國家（土佐藩を意味する）  
引用者）心痛仕へ（五月十三日付、父宛書  
状）と主張してゐるように<sup>(24)</sup>、武力討幕運動に  
参加する一方で、かなり強い藩閥的な対抗意  
識を温存してゐたのであり、これは幕藩体制  
的な身分意識かう脱却しえないものであるこ  
とを示すものであらう。武力討幕派はこゝよ



うな層を広汎に含み、其必然性と同時に必要  
性をも持つていたのである。

さうに武力討幕派は、討幕路線に草莽層と

いふよりもさうにきつうに意識的でない農

民・町人層をも組織する可能性をみせた。中

岡慎太郎の討幕理論においては、  
「暴客」

草莽尊攘派の立場があくまで貫かれていたし、

長州藩においても、農・商層の新たな組織

軍事編成を推進しつつあった。有名な慶応ニ

年一月二十一日の薩長同盟の盟約の中には、



「万一戦負色にこれありけとも、一年や半年に而潰滅致けと申事はこれ無き事」といふ一策があつた。<sup>(25)</sup> 彼らは大政奉還派とは異つて、たとえ内乱に訴えても「忽瓦解倒乱」という事態に立至らせない自信があつた。少くとも長州討幕派には、「四境に敵をうけても、藩内にふいて農民の支持の下に割拠」でき、るだけの体制を確立してゐたのである。このように少くとも討幕戦に関する限りは、民衆の支持を期待することができる自信こそが、



彼らをして武力討幕にふみ切らせ<sup>た</sup>要因でも  
あろうし、大政奉還糸と異ならせる重要な点  
でもあろう。中岡慎太郎も、土佐藩の主流が、  
大政奉還の周施に際して京都に出兵しないこ  
とを決定するや、<sup>7</sup>此よりは鬼ても諸侯頼む  
に是り申すす、私共微力を奮ひ、草莽を以て  
天下を動かし、御目に奉<sup>懸</sup>申す可くし、(本山  
只一郎宛書状<sup>26</sup>)と、先引の書状と同様在藩の  
大目付本山只一郎に書送るやである。他方五  
月には早くも在京の勤王黨員島村寿太郎ら三



名は、拳兵準備のため帰國してあり、<sup>(27)</sup> さらに  
九月に入ると、獄中であつた勤王黨員が相つ  
りて許されて出獄し、<sup>(28)</sup> 勤王党的勢力は、武力  
討幕の方向において再度結集しはじめたので  
ある。しかも彼らは板垣退助をその首領とし  
て、板垣一派の討幕派（谷干城の表現に従え  
ば）曰復古党<sup>(29)</sup>と同盟するようになったので  
ある。武力討幕派は大政奉還派が、守旧的左  
幕派と結びついてゐた<sup>(29)</sup>とは異つて、草莽  
層をもその組織に含みこみえたといえよう。



このことによつて、大政奉還の建自成功後、  
またも討幕派の抑制がはじまりかけた状態(註)の  
中で、討幕派糾断の行動が佐幕派によつて起  
されたにもかかわらず、  
「乾初復古党の危急  
は此時より甚敷はなし、然れども復古党は東  
西七郡に涉り過激派と一致合体したれば、僅  
々たる城下士格が、如何に政府に迫るも遂に  
其成效なし」との自信をもつことができたの  
である。<sup>30</sup>

(註)

十一月二日付の小笠原唯伸ハ(復古党系)



から谷干城宛書狀に、「過日大目付被仰  
付は処、在官總に十二日にて免官被仰付  
は、退助へ板垣——引用者も免官にて  
御座は、切今以大榎へ佐幕派を意味する  
——引用者への論尤高く、僕輩殆ととん  
ぼの首と相見へ申はしとべられている  
このように草莽さらには農商層を組織しえ  
たところ、武力討幕派の勝利の可能性は約  
束されたといえよう。しかしここで注意され  
ねばならないのは、こうした層の武力討幕運



動參加の意識は、一面きわめて單純な名分論  
的意識もあるが、他面反封建的性格をもつ可  
能性があったが、これは決して市民革命運動  
の一翼を形成しうる可能性には發展しないも  
のであつたといわねばならない。むしろ素朴  
な現状打破の意識から出發するところがあつ  
たのではないか。この頃から討幕運動に  
參加しはじめた階臣林有造は、討幕運動參加  
の理由を、主家である家老山内太郎左衛門を  
大名にして、自分はその家老になるつもりで



あつたと、回顧してゐるが<sup>(32)</sup>、このやうなことは、この討幕派大衆には恐らく共通するものであつたと考へられるのである。  
以上のやうに武力討幕派の中で、討幕を通いて統一國家を形成するといふ方向を意識してゐた層は、指導者の一部限られた層であつたのにもかかわらず、この政治路線は、上は幕藩領主層から下は農民・町人層までも動員し、組織しうる必然性と必要性和をもつてゐたのである。いゝかえらば、武力



討幕山 といふ点に關する、かなり広汎な層の  
統一行動が、まさしく武力討幕運動であつた。  
従つてその統一行動は、武力討幕山に關する  
限りであつて、討幕後の新しい形勢、新政府  
建設の形勢下において、統一國家形成の方  
向を認識しえなかつた層は、まさにその時矣  
かう没落せざるをえなかつた。明治政府の基  
礎の脆弱性とそれ故の專制的性格とは、まさ  
にここに出發するといわねばならない。



① 一 依乃不高行日記  
—— 稿本 四 豐範公記

② 一 勤王秘史 依乃不老侯昔談 三 四五頁。

③ 一 谷干城遺稿 四 (上) 四〇頁。

④ 一 阿ノネスト・ワトウ 改訂稿一 一 外 文官の見た明治維新

(上) 二 四〇頁。

⑤ 一 改訂稿 馬関係文書 四 (一) 四一八頁。

⑥ 一 同前 (一) 二 九七頁。

⑦ 一 同前 谷干城遺稿 四 (上) 四一頁。

⑧ 一 同前 (上) 五 六頁。



⑨

曰 依乃不談 占 四二四頁。

⑩

坂崎斌著 曰 鯨海醉侯 占 二四六頁。

⑪

曰 維新日報纂輯 占 四七五頁。

⑫

曰 鶴鳴余韻 占 (F) 一〇七頁。

⑬

曰 同前 (F) 一〇頁。

⑭

曰 依乃不談 占 四二四頁。

⑮

曰 坂本龍馬関係文書 占 (一) 三七七頁。

⑯

曰 同前 (一) 三八二頁。

⑰

宮内省編 曰 岩倉公実記 占 (中) 二九頁。

⑱

曰 不中孝父日記 占



①⑨ 瑞山會編 四維新土依勸王史 四 · 一〇三一

頁。

②⑩ 一行々筆記 L (史籍雜纂五卷 · 四五八頁)。

②⑪ 曰谷干城遺稿 四 (上) · 四二頁。

②⑫ 尾崎卓爾著 曰中岡慎太郎先生 四 · 三五二

頁。

②⑬ 瑞山會 芥獨書 · 一〇四七頁。

②⑭ 曰谷干城遺稿 四 (下) · 三三九頁。

②⑮ 曰坂本龍馬與徐六書 四 (一) · 一八八頁。

②⑯ 尾崎芥獨書 · 三六九頁。



②瑞山會前獨書。一〇四八頁。

②同前。一一四九頁。

②谷于城遺稿正(上)。四九頁。

③同前(上)。五五頁。

③同前(上)。四九頁。

③林有造述「懷旧話」(上)依史話二六號。

三頁。

第四節

明治政權への展望

——むすびにかえて——

「広く會議を興し、万機公論に決すべし」

という五ヶ條の誓文の第一條は、福岡孝

弟の草案に「列侯會議を興し」とあつたとこ

ろから、從來からこの五ヶ條の誓文にみ

られる方針が、公議政体論的な列侯會議体制

前節までの理解に従之は、大政奉還路線の實現

であるとしていた。坂崎斌は、「諸侯

會議といふ精神」が「誓文」の「趣旨」であ



り、大政奉還後「越土兩藩」によつてその「草案」が出来上り、「伏見戦争で絶えたもの」が再び御誓文の草案となつた。と、その理由を説明してゐる<sup>①</sup>。ところが最近、大久保利謙は、以上のやうな通説にたいして新たな批判を提起された<sup>②</sup>。それは、福岡孝弟あるいは由利公正によつて作られた草案は、大政奉還後「諸侯会盟」・「簾前誓約」のための方針案として、明治元年正月に作成されたものであつて、現実に公布された木戸孝允の修正案は、

いはばこの草案を「換骨奪胎」するこ  
とによつて成立したものであつたとい  
うのである。そして前者が、雄藩連  
合政權強化の方向をもつていたの  
にたいして、後者は、内容が開明  
的であるのに比して公布の方法は  
天皇の神権性を強調してゐる点  
が特徴的であるとい  
ふ。

この大久保利謙の意見はきわめて重要であ  
ると考へる。何故なら、口誓文  
に窺われる成立した当初の新政  
權の基本的性格が、すで



に大政奉還路線に沿った列藩會議的体制を克  
服して、天皇中心の統一政權確立の方向を確  
定してゐたことを示すからである。いゝかゝ  
るなら新政權の基本的方針は、版籍奉還ある  
いは屏藩置県をまたずの成立の当初から、  
幕藩体制を前提とした雄藩連合的な連邦國家  
体制の方向を否定して、天皇を中心とした單  
一不可分の絶對主義的な統一國家確立の方向  
を明示してゐたといえよう。新政權が成立の  
当初から、以上のような方向を確定してゐた

ということは、明治維新の性格をきわめて明瞭なものであらう。

本稿において、維新運動内部の相対立する二つの道を追求してきた。そしてこれは共に、対外的危機に対処する國家的統一の方向を模索する二つの道でもあった。明治維新を現象的にみるならば、幕藩体制的な分権体制を克服して中央集権的な統一國家を確立していく過程であつたことは、誰しも疑うことのできない事実である。しかし重要なことは、その



ことを可能にした。または必要とした条件、お  
よびこの条件によって規定されてくる具体的  
内容の問題である。本稿においては「癸丑以  
来」という言葉を特に重要視した。そのこと  
の意味はいうまでもなく「外圧」の問題を正  
しく位置づけるためであつた。統一國家への  
要請は、内的必然性として提起されたのでな  
く、あくまでも「外圧」の問題から要請され  
ていたのであつた。ということはとりもなお  
さず、本来分権体制を基礎づける封建制度が

ブルジョワ革命運動によつて廢絶されることを通して實現されるべき中央集権的体制の確立が、まさしく封建的支配者の手によつて實現される運命をもつていたことを示すものであろう。

改革派が安政期に至つて、とにもかくにも海防問題を中心に、幕藩体制の集権化への再編成を模索しはじめたといふことの意味は右のようなものであった。だがたとへば改革派によつてではあれ、日外圧への抵抗の問題



題が、國家的統一の問題の中に内在化して提

えられたことは重要である。何故ならそのこ

とによつて、『外圧』への抵抗を單純なる排

外主義に終らせず、たとえそれが封建的支配

者の手によつて行われるものであつても、日

本の『近代化』を促進する重要な契機となつ

たからである。そしてこのことを可能にした

条件は、第一には、本稿で直接的にはあきら

かにしなかつた問題であるが、内在的近代化

の主体の成長の問題、すなわち近代化を内在

的に基礎づける資本主義的生産様式の一定度  
の成長にあつた。そして予ニには、幕藩領主  
層内部における改革派の成立である。彼らが  
幕藩体制的諸矛盾と支配者の立場からではあ  
れ対決してゐたといふことが、  
面したとき、ブルジョワ的發展に對して  
近代化と促進することとを可能としたのであ  
つた。

だが維新運動の当事者たちは、  
癸丑・戊午以来のこととも強調してゐる。いふま



でもなく安政の大獄の問題である。従つてこの戊午以来のことと言葉の意味は、一つは改革派的立場に立つ國家的統一の方向の挫折を意味し、もう一つは尊攘派といわれる新しい政治勢力の成長の問題であつた。この尊攘派とりわけ草莽尊攘派の成長はきわめて重要である。何故なら改革派が、幕藩体制再強化の立場を脱却できなかったのにたいして、とりわけ草莽尊攘派の政治論あるいはその行動を通じて、はいめて幕藩体制の存をうりこ

えることが可能となつたからである。明治維新が、単なる幕藩体制の再編成にとどまらず、単一不可分の統一國家の形成として實現したということは、まさにこの草莽尊攘派の出現によるものであつたといえるであらう。そしてこの尊攘運動の展開は、改革派による公武合体運動を展開せしめて、明治維新への二つの道を出現させることとなつたのである。こうして明治維新への二つの道は、慶応期に入つて、武力討幕路線と大政奉還路線



として具体化していったのである。大政奉還路線が改革派の立場を前提としていたのにたいして、武力討幕路線は、尊攘運動を前提としていた。従つて武力討幕路線は、田割松那論といわれる組織論によつて、封建的支配者の論理が貫かれ、さらにいえば、田絶対主義への傾斜田が明確になり、単一不可分の統一國家形成の道をあきらかにしていった。そして明治維新が、大政奉還にとどまらず、王政復古に発展し、さらに戊辰の内訌に突入していった。

たことは、この武力討幕路線の勝利を物語る  
ものであり、そしてさらに日五カ條の誓文に  
における「列侯會議を興し」から「広く會議  
を興し」への変貌は、連邦國家路線にたいます  
る統一國家路線の勝利を意味した。

改革派の雄藩連合運動にはじまる明治維新  
への一つの道は、安政の大獄に一頓挫し、参  
預會議において空中分解し、戊辰の内亂に突  
入したことをもって決定的に敗北してしまつ  
た。この改革派路線の出現に、日本における



「近代化」の一つの可能性がみられたのであるが、結局この可能性は、もう一つの尊攘運動にはいまる道によつてのりこえられてしまつたのである。このことは一体何を意味するのか。それは改革派と尊攘派との相違にもとめられるであろう。改革派が、いかに従来の特権を改めたとはいへ、幕藩領主的支配者が立場は、あくまでまもろうとしていた。ところがそれにたいして尊攘派は、反封建的政治勢力として結集したのではなかつたが、身分的

に被支配者に属す諸勢力をも組織してゐた。  
彼らはいわば治者意識から『尊王攘夷』のス  
ローカンをかかげ、その限りでは改革派とは  
それ程へだたりはなかつたのであるが、彼ら  
がその尊攘運動に、被支配身分をも動員した  
ことによつて、それは一見國民運動的な性格  
を付与してゐた。従つて彼らの主張する統  
一國家は、封建的支配者のみの統一を目指す  
封建的民族主義に基くものではやなく、  
被支配身分をも含めた諸勢力の統一を要求す



る民族主義に基くものであつたといわねばならぬ。

もちろん彼らの武力討幕のための組織論が

日割拠論であつたがため、一見大政奉還路

線における列侯会議的な雄藩連合政權と同

様な權力体系樹立の方向を示したか、それは

あくまでも統一國家形成の前提として必要な

手段であつたにすぎなかつた。従つて新政權

は、直ちに單一不可分の統一國家の形成を目

がすのである。だが注意しなければならぬ。

のは、この武力討幕路線に参画した諸勢力が  
全て、統一國家形成の方向を明確にしていた  
訳ではない。むしろほんの一到り、指導者  
だけがその方向をはっきり認識していたに  
すぎなかつた。土佐討幕派の指導者であつた谷  
干城は明治二年になつてさうな版籍奉還に反対  
して、「藩臣に在りて郡県可然と申す者は、  
鄙賤無禄の者又は不平不逞の徒にして純忠の  
者には非ず、其仔細は、父に不孝にして祖父  
に孝を尽す者なき道理なり、父を捨て祖父に



孝せんと欲る者、其心必ず別に求る処有るも  
なり、父に孝なる者豈我が父の父に不孝な  
らん哉、一國の君に忠なるもの豈に一國の君  
の君に不忠ならん哉、此理能々御酌取被遊度  
奉存けしへ三條實美への意見書」といふので  
ある。なお依然として幕藩体制的身分秩序の  
墨守を主張してゐるのであつて、他は推して  
知るべきであらう。

要するに日本は、たと之多くの反討論者を  
その内部にかかえながら、明治維新によつ

て單一不可分の統一國家へと轉化したのである。従つてそこから、絶対主義的な專制的な中央集權國家が形成されるのであるが、同時にそこから近代化はいまつたこともあきらかな事實である。われわれは、日本の近代化が、政治的民主主義や經濟的自由主義を前提にすることによつて成立したのではなく、海外圧迫に抵抗するため國家的統一として實現したことを知らねばならない。このことは日本が、インドや中國と同様に、植民



地化の危機にありながらこれをともかく退け  
たことを意味するものであるが、同時に絶対  
主義的天皇制の強力な残存という不幸な事態  
をも招いた根源がここにあつたことをも知り  
うるものである。

① 日史談会選託録 乙・二〇七号。

② 大久保利謙稿「五ヶ條の誓文」に関する一  
考察（『日史地理』八八卷・二号）

③ 日谷干城遺稿 乙（下）・三九頁。

尊

王

之

攘

夷



一、尊王攘夷論

明治維新の思想的支柱が攘夷論であつたといふことは、明治維新が少なくとも形式的には王政復古の形をとつたといふ意味において正当であらう。しかし、いうまでもなく明治維新は、決して正政復古天皇制の単なる復古ではなかつた。こゝういう意味において尊王・攘夷論だけでは、明治維新を充分思想的にめきらかにすることができない。それにもかかゝらず明治維新において尊王・攘夷論が

はたしか政治史的役割は、きりめて大まかつた。それは、まさしく「王權は無秩序のなかの秩序をあらわし、また叛逆的な諸侯国への細分にたいして形成途上の国民をあらわしていた」へエンゲルスからである。尊王論が、幕藩体制の動搖のなかから提唱され、そして封建的アナーキーの背後に沈んでいた天皇權力を再び政局の表面によみがえらせ、この理由は、幕藩体制の動搖を切りぬけるための権力の統一をはかるために、この古代以来の



傳統的な權威をもつ天皇權力が恰好のより所であつたからである。

この尊王論が、政治史の上に意味をもちはじめたのは、竹内式部の寶曆事件、山縣大貳の明和事件などからではあるが、それが具體的に政治的影響力をもつものとして廣く武士の間に滲透していったのは、水戸藩主齊昭およびその家臣によつて提唱された水戸學からである。水戸藩士會澤安へ正志齋は、一八二五年（文政八）藩主齊脩に獻じた『新論』

において、「神州天日之嗣世、宸極を御した  
まひて終古易らず」といふべし。さらに「土地人  
民を——に統ずる事を得ざるときは、政敵以て  
施すべからず」と主張して、天皇新政を強調  
し、天皇を中心にした権力の統一を説いてい  
る。しかし、それは決して幕藩體制を否定し  
て統一國家を目指すものではなく、幕藩體制  
強化のために天皇の意義を強調しただけであ  
った。このことは、一八四二年へ天保一三  
徳川齊昭が、老中水野忠邦への建言に、幕府



が尊王の誠意を披瀝することか、諸侯・流民  
外夷ほどの「非望の念」をたちまう所以であ  
り、切迫しつつある内亂を未然に防ぎ、幕府  
存立の基礎を固からしめる第一の條件である  
と主張していることかろあまうかであるう。  
しかしこのことから、尊王論の提唱がもった  
政治史的意義を低くみることには許さぬない。  
この尊王論が、幕藩體制再強化の思想であっ  
たにしても、このことはとりもたず封建  
的支配者が、幕藩體制の動搖をばつまり認識

しなことを意味している。そしてこのことは  
この尊王論が、天保期以降各藩に成長してく  
る改革派——幕藩体制の動搖を切抜けるため  
に門閥上士層に抵抗して結果してまた政治勢  
力——のイデオロギイ的支柱としての役割を  
果たす可能性をもっている。少なくとも水戸藩  
においては、尊王論が文字通り改革派のイデ

オロギイ的支柱であつたのである。

しかし天保期においては、まだ天皇の權威  
によつて幕藩体制を補強しようとする動きは



政治的現實としてはおろか、いふことが、  
ところか、弘化期以降外国船の日本渡來がよ  
うやく現實化するにつれて、封建的支配者の  
危機意識は、「内亂」だけでなく「外夷」に  
よつても現實感をあたえられるようになった  
くる。この結果、天皇制を幕藩體制再強化の  
ための現實的權威として利用しようとする  
方向が、現實の政治的日程にのぼせられてく  
るのである。嘉永・安政期に具體化する老中

阿部正弘・徳川齊昭・越前藩主松平慶永・薩

摩藩主島津齊彬・土佐藩主山内豊信などによる雄藩連合政策は、まさしく右のような意識の政治的實踐であり、各藩に成長してくる改革派は、この藩主層の政策を推進し支持する政治勢力であつたのである。この雄藩連合政策は、幕府の獨裁だけでは、や危険をきりぬける自信を失つた阿部老中が、雄藩の勢力と妥協しその上に天皇の權威を利用することによつて、幕藩體制の補強を企圖したものであつた。



ところかこのような幕府政治修正の動きに  
對して、参根藩主井伊直弼を中心とする諸代  
の諸藩は、幕府獨裁を主張して反對してくる。  
この對立は、一應幕府獨裁派の勝利に終り、  
雄藩連合政策は押しながされてしまうが、こ  
のよりに改革派的勢力が獨裁派に敗北したこ  
とによつて、幕藩體制はかえつて一層深刻な  
危機に迫いてしまう。すなわち大老井  
伊直弼が勅許をまたずに開国したことによつ  
て、從來一應別個なものであつた尊王論と攘

夷論が結びつき、また決して反幕思想でなかつた尊王論に、反幕的性格が附與されることになり、さらにこうしたことの政治的なあうわれとして、改革派の敗北の后から改革派をのりこえて反幕運動に挺身する勤王の志士を生みだすに至り、それが單に武士層だけでなく、豪農・商層までもこの政治運動にまきこむ結果となるからである。幕府への御忠節は即ち天朝への御忠節にて二つこれ同じく候し

一山は縣教育會編輯、吉田松陰全集に八十一の



べていた吉田松陰が、守政の大獄に直面して  
「今の幕府も諸侯も最早酔人なれば扶持の術  
なし。草莽崛起の人を望む外頼みなし」(同  
上九)とその思想をかえてい、た事實は、こ  
の間の状況の動きを如實に物語っている。

このようは尊王論の提唱とその變貌は、先  
ほどかうのべているように、幕藩體制をほぐ  
しく動搖させる反封建的勢力の成長に基づく  
ものであつた。この反封建闘争は、天保期以  
降一層はげしさを加えてくる世直し一揆にお

いて、もっとも革命的な姿を示してくるが、  
当面問題に於ける尊王攘夷運動に関して、世  
直し一揆の波にようやく足をさらわれつつあ  
る豪農・商層の動向が重要になつてくる。す  
なわち彼らの被支配者としての幕藩權力にた  
いする抵抗意識が、尊王論という姿をとつて  
現われてくるというこゝについてである。こ  
の尊王論は、先にのべた封建的支配者の危機  
の表明としての尊王論とは本質的に異つたも  
のを内包してゐたのである。



一八四一年、天保一二、土佐藩において結  
成された庄屋同盟に、私には右にのべたよ  
うな政治勢力およびその政治意識としての専  
王論の典型をみることができるとは、庄  
屋、豪農層の直接的には藩権力と結びつきな  
がら商品経済を獨占しようとする城下町特權  
商人に對する抵抗であつたが、彼らがとりな  
すんだ盟約に、反封建的政治意識を内包して  
専王論をみることができるとは、彼らはその中  
で、吾黨之外へは口外を制すべき最大之密事に

と前あきしなから、一月一夫四海之内……其  
總主はかこくも天皇尊、御代官は將軍、御  
與頭は諸大名是を烹鮮の職と言、小頭は庄屋  
にて土地人物之總宰しであるとして規定して、自  
らを一土地人物之總宰しとして「賤しき庶民  
から區別されることを要求しながらも、將軍  
を代官に、大名を組頭に比定しているのではあ  
る。さらにこれに加えて、「勿論賜はる所であ  
知行所へ封建領主の土地へは根元王地にて作  
人は即皇民之儀に付心儘に課役を言付諸代々



家來同前に取報申儀は相成リがべき道理に候レ  
へ平尾道雄著「土佐農民一揆史考」のとあべ  
て、客觀的には領主的土地所有を否定する態  
度をあきらかに示している。この庄屋層の意  
識は、小前百姓層に對する村役人層の權威の  
自覺であり、さらにいえば封建的支配の新し  
い擔い手になろうとする要求の表明でもあつ  
たが、他方においては、幕藩權力の農民支配  
を拒絶する態度をあきらかに示しており、そ  
の根據として作人は皇民であり天皇が日本の

總主であるとの專王論をもちだしているの  
ある。まさしくこの豪農・商層の專王論は、  
彼らが即自的に内包している反封建性の具體  
的實現形態であるといえよう。封建的支配  
者の專王論と同じように復古的な形をとりな  
がらうも、その實質は革新的性格をもってい  
るのである。そしてこのような專王論およびそ  
の擔い手の成長は、本來反幕思想ではなかつ  
た專王論をして反幕的なものたらしめていく  
のである。この專王論が、その後、つぎにの



べるように、攘夷論と結びつき、安政の大獄以降一層の擴がりと深まりを示す反幕運動のイデオロギー的支柱となつていくのである。以上のべた二つの尊王論は、共に幕藩體制の動搖を切抜けるために權力の統一をはかるうとする政治意識の表明であつたが、封建的支配者のそれは、必ずしも幕藩體制を否定するものでなく、むしろ幕藩體制再強化のため天皇の權威が利用されてゐた。そしてこの意識の政治的實踐が、雄藩連合政策をうけ

つぐ公武合體運動であり、この政策を推進する政治的勢力が各藩に成長してきた改革派であつたのである。ところがこれに對して豪農・商層の尊王論は、改革派をのりこえる「勤王の志士」の行動にその政治的實踐を見ることのできる。そしてこれが攘夷論と結びつき、<sup>「</sup>依幕開國<sup>」</sup>に反對する反幕運動のスローガンになり、「勤王の志士」と豪農・商層は幕府を否定して王政復古を唱える尊攘派に成長していくのである。



二、尊王攘夷運動

幕府獨裁を修正しようとする雄藩諸侯の政治活動は、いわゆる「處士横議」の風潮をひきおこした。とくに幕政修正に天皇の權威を利用するための畫策である「京都手入」において、越前藩士橋本左内・薩摩藩士西郷隆盛、美濃出身の梁川星巖、舊小濱藩士梅田雲浜その他が中心になつて活躍し、各地の尊王攘夷論者を糾合しつつあった。ところが安政の大獄に示された幕府獨裁派の強暴なテロル

は、このようた勢力をして、幕府修正を畫策  
し、つゝあつた雄藩藩主を中心とする改革派的  
勢力を乘りこさせるに至つた。水戸藩にお  
いては、一八五八年（安政五）八月直接同藩  
に下つた開國反對の孝明天皇の内勅をめぐつ  
て、改革派は、幕府に遠慮して内勅の返納を  
主張する鎮派とそれ反對して幕政改革の強  
行を主張する下士層を中心とする激派とに分  
裂する。激派は、藩廳主流の鎮派の内勅返納  
を武力で阻止せんとしているのである。また



薩摩藩において、島津齊彬の安政改革を支  
持・推進した勢力のなかから堀仲衛門・西郷  
隆盛・大久保利通などの「突出」へ脱藩舉兵  
し、水戸藩激派と共に「奸」老中間部詮勝・  
大老井伊直弼を除く「直接行動」によつて幕  
政修正の強行を主張する誠忠組が形成され  
くる。長州藩の吉田松陰を中心に、松田村  
望、グールーが、藩廳主流の改革派の壓迫を退  
けて反幕運動にのりだしてきたのもやはりこ  
の時期であつた。

ところがこのような政治勢力の主張は、決して幕府自體を否定するものではない。彼らの目的は、  
「除奸」によつて幕政改革を強行するところにある。除奸計畫に參加して、薩摩藩士高崎猪太郎は、「亡君へ島津齊彬」の遺志を継ぎ、侯有志之者は今に至りて百般不撓勤王之志肝に銘じ、憤悶慨息罷在候へ。文部省編『維新史』(一)と水戸藩士にのべている。しかし、この幕政改革の主張は、幕府が勅許をえないで開國を強行した



ため、當然のことながら攘夷論と結びつかざるをえなくなつた。こうして幕府獨裁が幕政修正かという争點は、開國か攘夷かに轉化し、全ての反幕的勢力が攘夷論者とならざるをえなくしたのである。しかもこれに加えて貿易の開始は、崩壊しつつある封建經濟に致命的な打撃をあたえた。生絲・茶・水油・海産物等の輸出商品を中心に一般物價の高騰をもたらし、また金銀比價の國際相場との違いからくる金貨の海外流出、およびこれに對處しよ

うとし衣通貨の改鑄は、この物價の高騰に拍  
車をかける結果となつた。このようは開國の  
影響は、一部の輸出商品關係者を除いて廣汎  
に民衆はもちろんのこと下士層大衆をも含め  
て深刻な生活難に陥れることになる。このよ  
うな情勢は、攘夷が國民的な要求であるかの  
ようは様相を呈せしめた。こうして尊王攘夷  
運動は、單なる幕政改革をのりこえ、改革派  
とは階級的本質を異にする尊攘派を成立させ  
るに至るのである。



こうして一八六〇年（萬延元）三月三日の  
大老井伊直弼暗殺、一八六二年（文久二）一  
月十五日の老中安藤信正襲撃、そしてその間  
の多くの外人殺傷事件等によって、  
攘運動は一層のはげしさを加えるに至ると共  
に、その政治意識を大きく變化させていった  
のである。井伊大老を暗殺した水戸・薩摩の  
藩士は、あくまで「除奸」による幕政改革を  
目指していたのであるが、安藤老中襲撃には  
それのりこえる方向が示されていった。その

「新好趣意書」には「も頭幕府に對し奉り候  
ては異心を挾候儀ニハこゝれ無く」とのべては  
いるが、この事件の指導者大橋訥庵の意識は、  
あきらかに王政復古を指向していた。彼は朝  
廷に提出した『策論』へ文部省編『新史』  
へ「ニ」の「ア」か「マ」で危き幕府ニ對  
シテ徒ラニ舊格ヲ守リ玉ヒ……何事モ御相談  
ハ幕府ト」ノ上ナラデハ決シ玉ハスト云フ事  
ニテハ……天朝モ亦幕府ト俱ニ顛覆ニ至リ玉  
フベシ」とのべ、さうして「某カ識レル豪農ノ



徒ニモ五十人百人ノ兵ヲ舉テ勤王セント欲ス  
ル者共五六輩ハアルコトユエ廣キ天下ノ間ニ  
テハ英雄夥シキ推テ知ルベシト主張してい  
る。この大橋訥庵の政治意識は、幕府自體に  
ば「異心」を抱かない「除奸」による幕政革  
とは本質的に異つたものゝを示している。彼は  
「當今の大關鍵へ朝廷にとつてハ幕府ヲ捨  
テ玉フト石トニシあると明確に言いまひ、そ  
レを支える力として「草莽微賤ノ勤王志士」  
を動員するとしているのである。ここにハ、

あきらかに幕藩體制を否定し、王政復古を目  
ざすことを政治的目標としてかかづるに至つ  
たことを示している。このような政治意識が  
兩毛機業地帯の豪農・商層を背景とし自ら豪  
商出身である大橋訥庵によつて提起されたこ  
とは注目しなければならない。われわれは、  
ここに先についた土佐藩における庄屋同盟に  
みち尊王論の政治理論としての具體化をみる  
ことができよう。さういふば、この大橋訥  
庵の王政復古論には、豪農・商層の尊王論が



即自的に内包していた反封建的性格の具體化ともいえるのである。しかもこのような尊王論が、先にのべたように攘夷論と結びついてくるといふことは、廣汎な下士層大衆をも王政復古の方向に向かひしめるものであった。

これに加えて、改革派によつて主導される

安政改革が、つぎのべるように、開國を是認し藩内の商品經濟を全一的に把握しようとする重商主義的方針を示してくるは、右のような尊王攘夷論をもつ下士層、豪農・

商層の政治路線が、改革派の政治路線と異な  
てくるのも當然である。このようにして單  
なる幕政改革としての意義しかもたなかった  
下土層主體の反幕運動は、つぎにのべる改革  
派の政治路線としての公武合體運動をのりこ  
えて、廣汎な豪農・商層と結びついた王政復  
古を目ざす尊王攘夷運動としての展開をした。  
たとえは長州藩において、松下村塾グル  
ープを中心とする尊攘派が、指導者吉田松陰  
の刑死後一八六〇年（萬延元）七月木戸藩士



と丙辰丸の盟約を結ぶが、それはまだ「除奸」  
による幕政改革の強行以上のものではなかつ  
たのである。ところが、一八六二年（文久二）  
一月、長州軍攘派の指導者久坂玄瑞の土佐軍  
攘派の指導者武市瑞山宛の書状は、長州軍攘  
派の飛躍を示している。「諸侯待むに足らず」  
公家待むに足らず、草莽志士糾合義舉の外に  
はとても策これ無き事と我共同志中申合居候  
事ニ御座候。失敬ながら軍藩も弊藩も滅亡し  
ても大義なれば惜しかうずし。つ武市瑞山開

係文書「へー」と彼はのべている。このこ  
とは、彼らが最後に頼みうるものは豪農・商  
層であることを切實に認識し、さうに藩主や  
公家をも傀儡化せんとして藩閥意識を脱却し  
幕藩體制をのりこえつつあることを示してい  
る。この尊攘派の飛躍の背後には、瀬戸内地  
帯の大庄屋吉富藤兵衛・同杯勇藏・下關の廻  
船問屋白石正一郎等の豪農・商層の支持があ  
ったのである。このようにして長州尊攘派は、  
一八六二年（文久二）七月に入つて開國を認



公武合體へ航海遠略策を藩是とする改革派  
をのりこえて、天皇絶對を掲げ幕府權力否定  
の方向を孕んだ藩是をたてさせ、藩政上に進  
出して長州藩をして全國の尊攘派の據點たらし  
めるのである。しかし長州藩の場合、豪農  
商層の支持が外國艦隊および征長軍の攻撃を  
目前にひかえ、一ハ六三斗へ文久三〇頃まで  
は、經濟的援助以上にはでなかつたこと、す  
なわち下士層と豪農・商層が黨的結合を示し  
ていたことが、この注意しておかねばならな

い。

このよう下等攘派の階級的性質は、つきに  
のべる士佐勤王黨がもっとも典型的であり方  
を示している。士佐勤王黨は一八六一年ハ  
文久元ハ八月郷士武市瑞山・岡太石彌太郎・  
下士河野万壽彌等が中心になつて結成したも  
のであり、その中心になつた階層は郷士・  
下士・村役人層であつた。この勤王黨の主流  
になつた郷士は、本來は戦國時代士佐を支配  
してゐた長曾我部氏の土着した遺臣を取立て



たものであつたが、江戸中期以降上層農民が  
郷土株を買得し郷土化することが廣汎に行は  
れるに至つて、その性格は大きく變化してし  
まつた。すなわち身分的には士分であつても、  
經濟的には全く豪農的存在になつたのである  
このようた階層を含んだこの勤王黨の要求は  
格式の打破による人材の登用と安政・文久期  
に改革派によつて行われし重商主義的政策―  
農民的商品經濟の藩權力による全一的把握と  
それによる長崎貿易―反對にあり、さういふこ

れうを通じての軍王攘夷運動推進にあつた。  
この軍王攘夷運動は、格式打破にみられる下  
士層の封建的支配者内部の反対派の運動とし  
ての性格と、重商主義反対にみられる豪農・  
商層のブルジョワ的發展を求める藩権力に對  
する反封建的勢力の運動としての性格を内包  
してゐるのである。ところがこのように土佐  
勤王黨が、反封建的勢力としての要素を内包  
してゐたとしても、それは即自的に含みえた  
ものにはかゝらない。



すなわち土佐勤王黨の全體としての性格は、  
彼らの意識が、あくまで土分として「老公へ  
山内豊信」の御志を継ぐ勤王黨盟約「武  
市瑞山關係文書」へ——ぐことを本分とし  
ていたように、封建的支配者内部の反対派で  
あった。このような郷土および村役人層のキ  
介意識は、豪農・商層のブルジョワ的發展の  
未成熟から、彼らを農民層をふまえた独自の  
ブルジョワ的反对派として成長させなかっ  
たところから由来している。しかしこのことか

ら勤王黨が、たとえきわめてまがった形では  
あれ即自的に内包していた反封建性を無視す  
ることばできない。上層農民や地方商人が、  
彼らに運動資金をだしあるいはアジトを提供  
して支持していたという事實は、このことを  
裏づけるものであり、まさしくこの勤王黨の  
政治行動において、先についた天保期の庄屋  
同盟に示された意識の政治的實踐をすすること  
ができる。

以上兩藩の場合からあきらかのように、軍



攘派の基盤は下士・郷土・豪農・商層にあつた。だから豪農・商層の即自的な反封建性が、軍攘派のなかにまわめてまがつた形ではあるが、内包されていたのである。このことによつて、たとえそれが空疎な軍王攘夷的分論として實現するにしても、下士層主體の幕政改革運動を、廣汎な豪農・商層をまきこんで幕府を否定し王政復古を目指す方向へ裾踏させることができたのである。

このようにして軍攘派志士は、一八六三年

へ又々三し二月十三日朝廷に設置され、國事  
參與・國事寄人に任命される。ようは軍機派公  
卿を通じて、また在留外人・幕府捕吏・佐幕  
派公卿等に對する「天誅」の威嚇によつて、  
京都政局のへげモニーを握るに至る。このよ  
うな軍機派が、三條實美をして破約攘夷の勅  
命をもつて一八六二年へ文久二し十月江戸に  
下らしめ、幕府に鎖國方針運奉を認めさせる  
に至るのである。ついで翌六三年になると、  
彼らは、王政復古をめぐして武力蜂起を企て

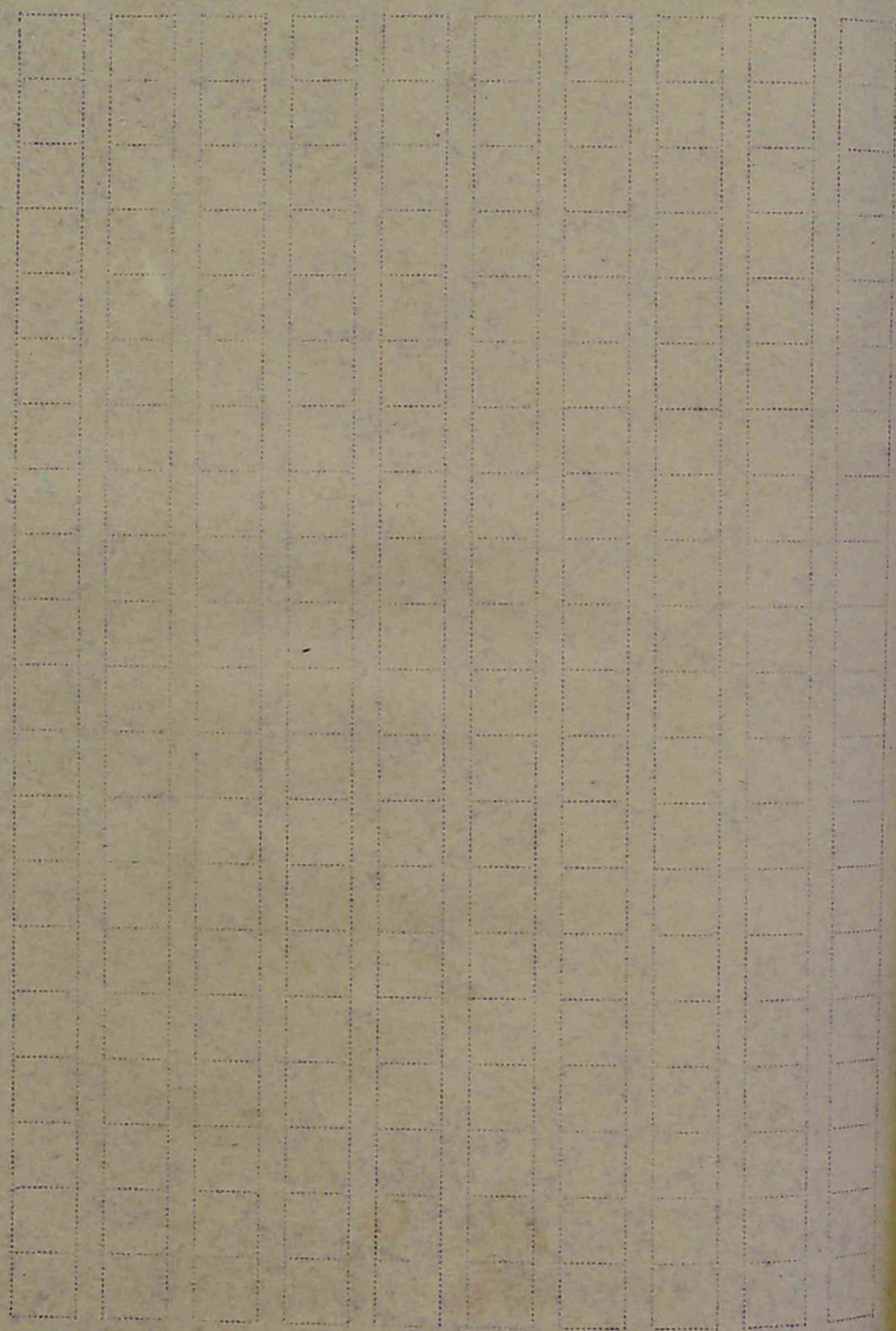


るに至る。同年二月二十二日の京都等持院に  
おける足利氏本像梟首事件をきっかけに、八  
月十七日の天誅組の亂、十月十一日の生野の  
亂に至る一連の行動が起されたのである。こ  
うした行動の組織體制は、尊攘派公卿を中心  
にした下士層と豪農・商層との同盟組織であ  
り、尊攘派の性格を端的に表明していた。た  
とえば、天誅組は公卿中山忠光を中心にし、  
土佐藩大庄屋出身吉打虎太郎を指導者とする  
下士・郷士・村役人層の同盟組織であった。

このような軍閥派の政治路線は、天皇を中心とする政權の統一を旨とすることにより、幕府權力を否定し日本を植民地にする、外國勢力に對抗しようとするものがあった。ところが彼らの行動は、きわめて無計畫的であり、單純な攘夷親政・王政復古を目ざしていかたにすぎず、幕府を否定してもその後にはいかなる政治體制を建てるかの具體的な見透しを何らもっていないか、たという状態であった。このような彼らの弱さが、右にのべた一連の



事件を  
みじ  
めな  
敗北に  
終ら  
せ  
て  
ある。



1154



### 三、公武合體運動

安政の大獄が、幕政改革運動を、幕府を否定する尊王攘夷運動に飛躍させる契機にたつたことは先にのべた通りであるが、この反幕運動がはげしさを加えていく情勢に對應して幕府側も、天皇の權威を無視することができなくなつた。これが櫻田門外の變のもたらしたた。幕府獨裁の後退によつて具體化したのである。幕府は井伊大老の横死後一カ月もたたない。閏三月一日久世廣周（關宿藩主）を老中と

し、それ以前からの老中であつた安藤信睦（磐城平藩主）と共に幕閣の中心にすえた。かつて一橋派に近い立場にあるといわれた久世廣周が再び老中になつたことは、幕府が雄藩に對して再び妥協的態度をみせるようになったことを示している。このようにして幕府は紀州派の中心的人物であつた木野忠央（紀州藩附家老）等を處罰すると共に、徳川慶勝（前尾張藩主）・一橋慶喜・松平慶永・山内豊信の謹慎を九月四日解除するに至り、十月十



九月には本戸藩に下つていふ内勅返納の猶豫を認めると至つたのである。

ついで幕府がとつた政策は王權が反幕運動のとりでになりつつある情勢に對處するた  
めに、天皇のもつ政治的權威を幕府強化のため  
めに利用することになつた。すなわち和官降  
嫁の奏請である。この政策は「公武益々御  
一和之筋ハ御國內ハ勿論外夷迄モ差響候ハハ  
第一國家の御爲レハ和官降嫁に關する老中ヨ  
リ所司代酒井忠義への命令書——文部省編

維新史Ⅱ(一)とあるように、開國以來はげしくなりつつある反幕運動を抑壓するため、いいかえれば反幕運動の最大の眼目であった。遑遑追求をせけるために、「公武一和」をはかったものであった。このことは、幕府自體が從來のようには形で幕府の權威を恢復することとが不可能であることを認識していたことを示しており、そしてこのような認識の上にたつて公武合體を幕府のヘゲモニーによつて推進し幕府の支配體制の建直しを意圖していた。



ことを示している。だからこそ幕府はこの  
和宮降嫁についてほかかなり強い態度をとって  
いる。幕府は一度断るべしにもかかれず再  
度要請し、和宮降嫁に反対した公卿へ徳大寺  
公純・中山忠能の退役を強く要求している  
のである。こうして四月頃から始められたこ  
の降嫁要請は、十月十八日になつてようやく  
勅許されるに至った。

このような幕府の動きに對應して、一八六  
一年へ文久三年三月二十八日長州藩において

長井雅樂の『航海遠略策』が藩是として取上

げられるに至った。長州藩ではすでに一八五

八、九年、安政五、六にかゝり、周布政之助を

中心にする改革派によつて重商主義的な富國

強兵策が推進されてつたが、吉田松陰の

遺志をつぐ松下村塾グループを中心とする勢

力は、この改革派をのりこえて軍機運動に挺

身しつた。このようない情勢のなかで長

井雅樂は、破約攘夷の暴論なる理由を説き、

開國進取が日本の隆國以來の國是であり、京



都朝廷は鎖國の方針をかゝ幕府はこれを奉承し、公武合體・海内一和の必要があると主張する。航海遠略策を提起したのである。これが改革派政權の受け容れるところとなり、老中久世・安藤の同意をうて、長州藩は公武間の周施にあたるに至つたのである。

幕府や長州藩が、このような態度を示すようにした。たのは、長井の建言にもとづいて周布政之助のかいた藩議に「近來外患内憂日々切迫過亂旦夕に相迫候ニ付し一修訂日所長同

天史(三)とあるように、外壓と激化しつつある尊攘運動に對處するためであつた。ところがこの公武合體運動は、改革派および尊攘派のそれそれの強硬な反對をうけるに至る。それは、このような公武合體が幕府のツケモノを前提にしたものであり、幕府獨裁の修正の上に公武合體をはかろうとする雄藩改革派とさう相對立するものであつたからである。たとえば、雄藩においては改革派が中心となり開國の必要性を認識し直接外國貿易にのり



だし一つあつたにもかかれず、幕府は一ハ  
六〇年一萬延元閏三月十九日にだされ五  
品江戸廻し令にみえり。外國貿易を  
統制しその利益を獨占し一つあつた。最初長  
井の意見に賛成していた周布政之助が、江戸  
の情勢を直接知ると共に、この幕府のハゲモ  
＝ 一 による公武合體運動に反對するに至つた  
のは當然であらう。他方尊攘派志士も、  
「當時之品吏等ハ久世・安藤老中等」と相謀り自  
然勅意を緩め奉り違勅御手傳之姿に相成候而

は天下之正氣に相觸れし一々木々孝元文書に  
いふるとのべているように、幕藩權力を否定  
せんとする様相を呈しつつある尊攘運動を背  
景として、この公武合體運動が王權を幕府強  
化に利用せんとすることに対して眞向うから  
反對したのである。  
こうして先にならうに、和官降嫁に中  
心になつて動いた老中安藤信正は、坂下門外  
に撃<sup>たた</sup>撃<sup>たた</sup>されるに至り、長州藩において、藩  
是としての航海遠略策は放棄せられ、長井雅樂



を自刃せしめるに至る。幕府は、もはや政局をリードする力を失いつつあったのである。

幕府のヘゲモニーによる公武合體運動を流産させた尊攘派志士が、この當時もつとも期待をもてこいたのは薩摩であった。というのは、一八六一一年へ文久元々の総り頃になつて島津齊彬の改革を支持した島津下總を中心とする日置派が退けられ、一突出し一脱藩擧兵を主張した誠忠組が藩廳の主流を占めるに至つた。そしてこの勢力が、藩主忠義の實父島

津久光を擁して大兵を率いて上京せんとして  
いたからである。

しかしこの久光の上京は、軍機派志士が期  
待しているようでは決してなかった。

久光は上京に先立って、堀次郎（伴左衛門）  
を江戸におかせ、一橋慶喜、松平慶永の輿用  
を幕府に要請してあり、また大久保利通とし  
て近衛忠熙に謁せしめ、上京の目的は、和官  
降嫁は眞の公武合體でない故、朝廷へ事實上  
は雄藩であるのへゲモニの下に公武合體



を推進するためであるとのべさせている。要するに久光の意圖したのは、雄藩連合政策をもう一度推進し、そのことにより、幕政改革・幕體の削減・公武合體により、舉兵・王政復古の意圖を示しつつあった軍機運動を抑壓するところにあった。久光が上京すると直ちに、仁見の寺田屋へ薩摩藩船宿へに乗った軍機派志士を斬らせたいのは、まさしく豫定の行動であつたとみることができよう。

このようにして久光は一八六二年へ之久

ニ、六月七日、千餘人の手兵を率い、勅使大  
原重徳を擁して江戸に入り、この結果七月一  
日、幕府は一橋慶喜を將軍後見職に、松平慶  
永を政事總裁職にそれぞれ任命するに至つた  
のである。こうして、幕府のへげモノによる  
公武合體の前提は實現した。

ところがこの公武合體は、單なる天皇の權  
威を利用し、幕藩體利補強を、さうに一步進  
めたものであることを認めなければならぬ。  
かゝるその本質は、安政かろ文久期にかけて幕



府および雄藩において行われ、改革の内容に  
みることができる。この意味においては、公  
武合體が幕府主導であろうと雄藩主導であろ  
うとその本質に相違はないのである。

幕府においては、安政期において、老中阿  
部正弘が畫策していた改革が、一八六一年つ  
え久々にわたって一層進められてくる。この  
改革の第一は軍制改革であって、その内容は  
歩・騎・砲の三兵を以てする陸軍、および  
六沿岸艦隊を組織する龐大な海軍の編成を目

標とする。洋式の親衛常備軍の組織計畫であつた。しかもこの軍隊は、全く農民および輕卒によつて編成されることになつてゐる。第二は商品經濟の全國的統制であつた。幕府は一八六二年へえ久しく五月、江戸に御團益御主法方會所を設けて、全國の商品を江戸に廻送させ、幕府の統制下におこうとしたのである。その他職制の改革を行い下級の有能官僚を登用し、また參勤交代を緩和してゐるが、右の二つの政策は、この文久期の改革が天保



期の改革とその性格を非常に異にしていること  
を示している。御國益御主法方會所の設置  
には、天保期の株仲間解散にみうけた抑商主  
義はもはやみうけなくなっており、ブルジョ  
ワ的發展にたいする封建的反動でありながら  
そこにはブルジョワ的發展への順應の姿勢を  
みることができ、幕府・諸藩の割拠體制を幕  
府自ら否定するものであった。常備軍の編成  
にしても、古い封建家臣團による軍事組織が  
使われるにたらず、新しい軍事組織の必要性

を幕府が認めつつあることを示している。要  
するに安政・文久期の改革は、幕藩体制の修  
正を要請するものであり、幕府権力の變質を  
指向するものであった。

このことは、雄藩連合・公武合體を推進し  
た雄藩においても同様であった。たとえは土  
佐藩において、藩主山内豊信、吉田元吉、  
東洋一を拔擢して安政期から文久期にかけて  
藩政の改革を行なっている。吉田東洋は、中  
土開明派である改革派を背景にして、天保期



にみろ小に抑商主義を脱却し、重商主義的な  
富國強兵政策への展望をみせる經濟政策の飛  
躍的轉換を企圖した。この轉換には、門閥上  
士層を排除して有能者を拔擢する官僚制的な  
政治機構の確立が基礎になっており、この改  
革の主體的勢力が、侵略的重主義的開國論を  
主張し、雄藩連合から公武合體への政治コー  
スを推進する中心的勢力になったのである。  
このように情勢は他の藩でも同様である。周  
布政之助等が中心になった長州藩、中根雪江

横井小楠等が中心になつた越前藩、島津齊彬が主導した薩摩藩において多少の異同はあつても、本質的には同様の改革が安政期に行われてゐる。

以上のべた安政期以降の幕府および雄藩の改革は、幕藩權力が自らのヘゲモニーの下に幕藩体制の轉換を企圖したものであつた。ブルジョワ的諸發展および支配者層の腐敗による封建權力の動搖は、もはや單なる綱紀の肅正あるいは抑商主義政策では止めることがで



まず、門閥層を排除する官僚制政治機構の確  
立、抑商主義を脱却しブルジョワ的發展の諸  
成果を封建權力が把握する體制の確立、さら  
にはこうした封建權力を支える新しい軍事組  
織の編成等による幕藩體制の修正が要請され  
たのである。封建權力の絶對主義への自己轉  
回が、まさしくここにはじまったとみること  
ができる。

公武合體の名の下に、何ら現實的な權力を  
もたない王權が、何か現實的に政治的な力を

もつかのように政局の表面にあうやうくる  
のは右にのべた幕藩權力の自己轉回に不可  
缺なものであつたからである。なぜならこの  
幕藩權力の自己轉回とは、封建的アナーキの  
止揚を要請するものであり、言葉をかえれば  
分散的の權力を統一することによりその封建  
的の支配體制の再強化を策するものであるか  
うである。そのためには傳統的な權威をもつ  
て天皇にをかたぎだし、彼らの支配體制を全  
てこの『天皇』に由來づけることかともつとも



適切であつた。

かくて一八六二年（文久一）から翌年（一八六三）にかけての京都における政局は、王権をめぐって絶対主義體制への自己轉回を目ざし公武合體をほかる勢力と、これをのりこえようとする軍攘夷志士とが相對峙するに至る。六二年六月の勅使大原重徳東下の時期迄は、ともかく前者が支配し、ところが同年十月の勅使三條實美の東下以後は、後者が王権を擁して前者をのりこえんとした時期である。ところが、

ぎいのべるようには後者の弱さから一八六三  
年へ文久三(一)八月十八日以陰謀攘派は京都を  
あいださし、その以後公武合體派が京都政局  
のへげモノとして握るに至るのである。



#### 四、軍攘派の敗退

軍攘運動は、先につたように六三年に入ると武力蜂起を開始するに至つたのであるが、この一連の事件は、はじめは敗北に終つてゐる。たとへば大和五條の代官所を襲撃した天誅組の亂は、農民層に年貢半減をもつて呼びかけた。舉兵は一時的には成功したが、幕府軍の來襲と共に農民層や十津川郷士は離散し反抗するに至り、中山忠之は下取に逃れ、吉村以下指導者は戦死してしまつた。

このように尊攘運動の急進性とそれ故の脆弱性は、まさしく尊攘派の階級的本質に基くものであった。芝いのべたように土佐勤王黨の場合からあまらかなように、彼らは改革派が主導する富國強兵策に對する徹底した抵抗勢力であつたが、その抵抗の仕方は、彼らが即自的に含みえた反封建性によつて農民層を動員する方向までみせながら、それは士分意識から脱却できないものであつた。このように彼らの二面性から、封建権力の絶対主義



體制への自己轉回であるところの改革派の政治路線に同調できなければ、また農民層と結びつき革命的な政治路線を設定することも絶對不可能であつたのである。この軍閥派の本質が、假うの行動をしてきわめて急進的なものたうしめながら同時にきわめて無計畫なものたうしめたのである。

だからこそ幕府側へ會津藩と薩摩藩は一八六三年へ文久三年八月十八日見事なクリテターによつて、この「暴論の徒」すなりち

三條實美以下の軍艦派公卿および長州・土佐  
を中心とする軍艦派志士を京都から追いだす  
ことができたのである。こうして軍艦派志士  
にとつて冬の時代がやってくる。土佐藩にお  
いても武市瑞山以下の軍艦派は捕えられ、あ  
るいは脱藩するに至るのである。藩外にあつ  
た中岡慎太郎も、在藩の同志に「涙をかかへ  
て沈黙しへ平尾道雄著の陸援隊始末記」にす  
べしと書送るゆゑはなうなかつた。

ところが長州藩においては、少し異つてい



る。六三年の一連の事件が敍之に鑑藩軍攘の  
體制が、あでに成立してゐた。長州藩におい  
ては、豪農・商層が士分意識に毒されること  
が少なく、軍攘派下士層と無媒介に結合して  
いゝかつた。そして庄屋同盟のよくな一般農  
民層をふまへた独自の政治的影響力をもつた  
組織を作り、軍攘派下士層に對して相對的獨  
自性を保持しようとしてゐたのである。こゝ  
に天保期に世直し一揆の洗禮を加へた農民  
層を自らの背後にひかえてゐる以上、その反

封建的政治意識を空疎な觀念論である軍攘論  
に昇華することができなかつたからである。  
このような事態は逆に、軍攘派をして豪農・  
商層的立場に泥ませることが少なく、改革派  
的開明性を容易に受容れる條件をあつたたの  
である。「決心未だ附めのい勸王と申唱へ右  
様の虚動こゝ有る義は功名勤王にて眞勤王に  
はこゝ無き事」へ「東行先生遺文」へと主張  
し、眞勤王とは防長二國の富國強兵にあると  
する長州軍攘派の指導者高杉晋作の意識が成



長してくるのは、彼が封建的支配者の立場を  
一歩もふみはずでなかつたところにあるので  
あつて、豪農・商層的立場からはこのようは  
意識は成立しえないものであつた。しかし、  
「有志者は輕卒以下に多御座候し、東行先  
生遣文」しとの言葉に示されるように、  
軍閥派下士層大衆および豪農・商層を通じて把握  
する民衆のエネルギーを吸収することは重視  
していた。このような柔軟な政治路線こそが、  
軍閥派をして藩を主導せしめ、さらに長州藩

をして閩藩軍攘から閩藩倒幕へと展開させ  
たのであり、そしてこのことを可能にしたの  
は、彼らが改革派をのりこえて守舊派に抵抗  
したからであり、さらに外國艦隊・幕府軍に  
攻撃されるという危機に長州藩全體が直面し  
たという政治情勢からでもあつた。

だが長州尊攘派においても、當初から高杉  
晋作に示されたような政治意識が支配的であつ  
たわけではなかつた。とくにハ・ニハの政變  
は、「薩賊會奸」という言葉に示される尊攘



論的必分論に裏づけられ、藩閥意識を彼らに  
植うつけ、一八六四年へ元治えし七月十九日  
の禁門の變にみろれる無暴な激發へと進ませ  
たのである。この間においては一藩による  
割據體制とその富國強兵策による充實化を推  
進することなくしては、「眞勤王」に幕府顛  
覆をなしえないとする高杉晋作の主張は受容  
しられず、同八月五日の四カ國連合艦隊の下  
關砲撃までにはなけりなかつたのであ  
る。この高杉晋作の主張が、長州藩全體の方

向になつたときいじめで、倒幕という政治意識が現實性をもつてくるのである。

軍機派は、以上のような弱さをもつていた

ため政局の表面から一步後退せざるを之はか  
一たのである。このあと公武合體派の雄藩著

主——一橋慶喜・松平容保へ會津藩主・京都

守護職・松平慶永・山内豊信・伊達宗城へ

申和島藩主・島津久光——は、一八六三年

（文久三）十二月三十日朝議参預——久光は

少しおこれる——に任命され、隔日に朝廷と

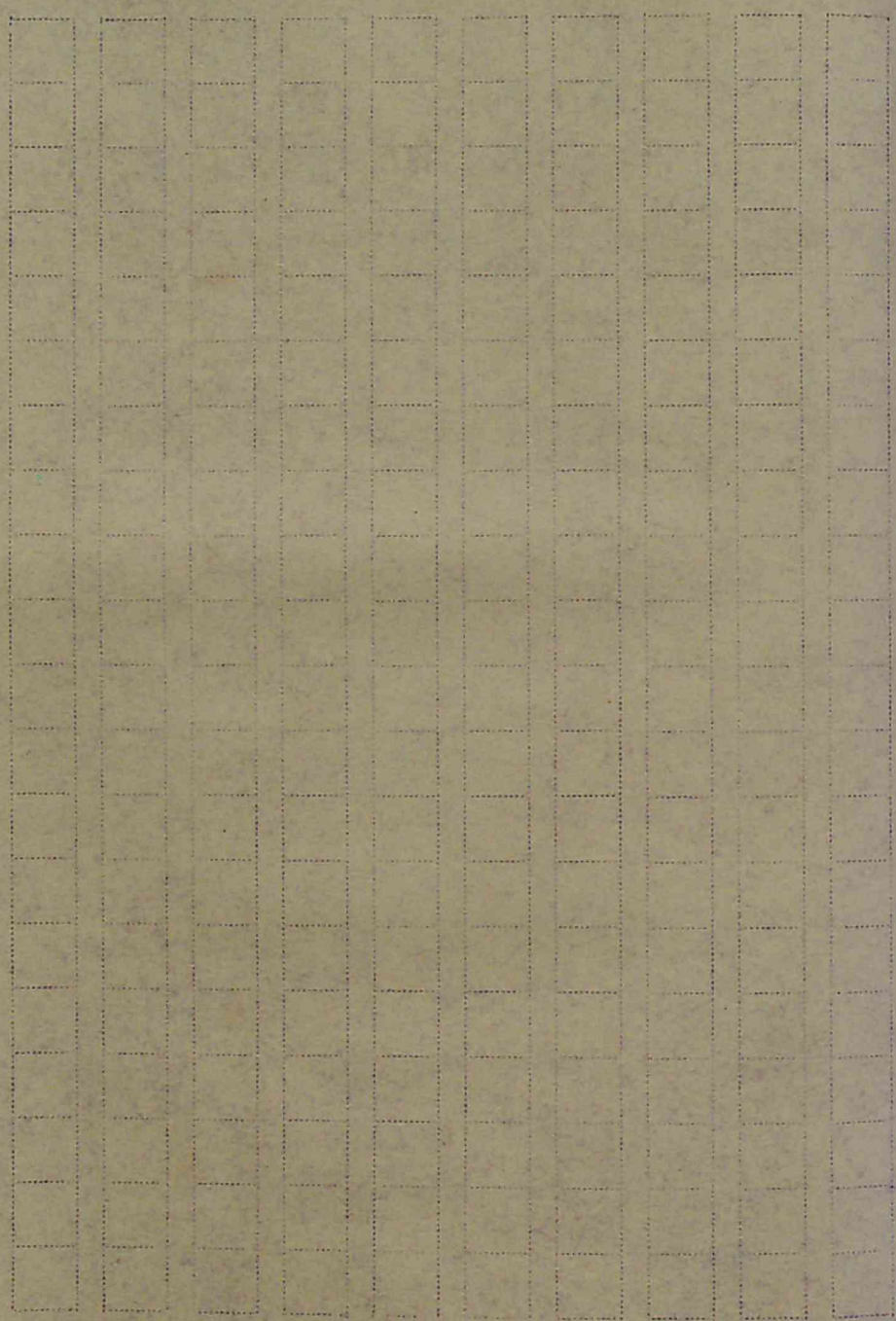


二條城において参預會議を開き、當面の國政・鎖國問題・長州藩處分問題等を協議した。さうに翌年一月、軍家茂が上京し、庶政委任と参預の幕政参加を要請する勅諭を賜ったのである。かくて雄藩主導による公武合體は、完全に成立したかにみえた。ところがこの公武合體策は雄藩中心の参預會議による政権統一は、いづかニカ月にして解體してしまうのである。その最大の原因は、幕府が政局のヘゲモニーを雄藩に奪われたいことにたいして、不満をもつ

ていふところにあった。長州藩處分に關しては一應統一できぬが、鎖國の方針に關しては全く對立したのである。雄藩の側はもはや攘夷の不可能をしり、外國貿易に利益を感じていふから鎖國に反對したか、幕府側は雄藩と同様に考へたがうも、参預會議に政局の主導權を奪われたい反感から一度決定した鎖國方針の撤回に反對したのである。幕府と雄藩は、絶對主義體制の形成というも、とも主要な問題に關して主導權争いから分裂したのである。



封建権力の内部矛盾は、公武合體策といふよ  
うな妥協的な政策ではもはや糊塗しえない情  
勢にまで立至つていたといふやう。



1192



五、倒幕運動の展開

一八六四年へ元治元（一）という年は、明治維新史において劃期的な年である。というのは、幕藩体制の矛盾がもたらした尊王攘夷運動と公武合體運動の二つの政治路線が共に、完全に行詰った年であり、倒幕への政治路線が準備されていく年であったからである。

尊攘派の敗退は、一八六三年へ文久三（三）七月二日の薩英戦争とその翌年八月五日の下関事件によって決定的になっただけ、このように

事態は、尊攘派志士をして一著による割據體  
制の必要を痛感させると共に、攘夷の不可能  
を痛切に認識させるに至った。こうして高杉  
晋作のいわゆる「真之御割據」は、富國強兵策  
による實力の養成が、彼らの方向となってい  
った。他方先へのべた參預會議の解體は、改  
革派をして、各藩が獨自に富國強兵策を推進  
し、このことを通じて幕府に抵抗しうる實力  
を養成して、自藩の主導權の下に權力の統一  
をはかろうとする方向へ轉身する契機となつ



た。

土佐藩においては、一八六三年（文久三）  
勤王黨を弾壓したあと、その翌年に入ってから後  
藤象二郎・福岡孝弟等の改革派を再び登用し  
吉田東洋の改革の徹底を期した。その内容は  
銅・樟腦等の國産品の購買獨占を行い、これ  
を長崎に輸出して蒸汽船・小銃等の洋式武器  
を購入する藩營貿易を強行する富國強兵策の  
推進にあった。これは、一八六六年（慶應二）  
二月開館した開成館を中心にして本格化して

いくのである。この間に改革派の指導者後藤  
象二郎は、事實上の藩主豊信に最後には倒幕  
の必要があることを説き、富國強兵策こそが  
そのための實力の養成であることをあきらか  
に認識するに至るのである。こうして彼は、  
その斗の終り頃に坂本龍馬の影響の下に幕政  
返上論を受け容れに至り、改革派は、か  
くの尊皇派と連繫を深める——坂本の海援隊、  
中岡慎太郎の陸援隊組織の公認——に至るの  
である。土佐藩改革派は、このよう行動きの



たかゞ大政奉還派に轉身し、幕府否定の方向を提起したのである。

薩摩藩においてはその積極的であつた。

というのは、薩摩藩における公武合體派は、

他藩の場合と異り本來の公武合體派である曰

置派をのりこゝていた誠忠組が中心であつた

からである。薩摩藩における經濟的後進性は、

豪農・庶層の尊王攘夷運動を成長せしめず、

そのため誠忠組は、部分的に脱藩したものゝを

除いては本來の尊攘派として成長していったか

った。そして彼らは、大久保利通に代表されるように、事實上の藩主久光を擁して雄藩主尊の公武合體運動を推進していたのである。

ところが薩英戦争のあと、必ずしも勝敗が決してはいなかった。にもかかわらず、横濱

で開かれた講和會議において、イギリスの要求をいれ、藩の方向は急轉回していくのである。所謂攘夷家なる者も先として航海練兵の實用を主張するに至り、中岡慎太郎「時勢論」——平尾道雄著「陸援隊始末記」——に



のである。こうしてこの戦争において捕虜に  
なった五才助が歸國後要求した富國強兵策  
が、強力に推進されることになった。

この政策が、参預會議の解體から幕府に受  
想をつかして歸國してきた大久保利通が中心  
になつて具體化してくるのである。まず第一  
に長崎に交易方を設け、生絲その他の輸出を保  
護し、さらに翌一八六五年へ應一にばフ  
ランスのモンブランと商社設立の契約をなし、  
外資導入して鑛山の開發・製造工場の建設・

外國品の輸入を計畫して、上かろのフルシヨ  
ワ化をはかつたのである。さらにこれと併行  
して、洋式軍備の整備をはかつた。まづ一八  
六四年へ元治え、六月開成所を設立して軍事  
技術と洋學を普及せめ。七月にはイギリスに  
留學生を派遣し、この結果一八六六年へ慶應  
ニ、五月には、開成所から海軍方・陸軍方を  
獨立せ、英國兵式を採用するに至つたのである。  
横井小楠はこれを評して、「薩州は自國取り  
堅め申す論一定いたし、愈よ以て富國強兵に



取りかかり、西洋器械も大抵取り寄せ、洋人も四五輩呼びよせ操練等甚だ盛下に相成候しへり。小桶遺稿』とのべている。藩儒著も「眞之御割據しにより、幕府その他に對して自藩の主導權の下に權力の統一をなしうる體制を固めていたのである。

長州藩においても高杉晋作の主張が受け容れられると共に、改革派の安政改革以來の富國強兵策が徹底されるが、この方向が確定されるには一八六四年（元治元）暮にはじま

る内戦を経過しなければならぬ。六四年に  
あける四カ國連合艦隊および征長軍の來攻は、  
改革派と尊攘派よりなる正義派にたいして守  
舊派である俗論派を擡頭せしめ、正義派を一  
時敗北せしめる。ところが勃前に逃げていた  
高杉晋作は、征長軍がまだ撤兵しない十二月  
十六日に下關に入り、俗論派打倒の烽火をあ  
げる。こうして奇兵隊と諸隊は、高杉の指揮  
の下に入り山口を根據として、萩の藩廳軍と相  
對峙するにいたつたのである。このような情



勢のなかで著鷹軍は、守舊派と中立派に分裂し、高杉の率いる勢力と中立派が結合することにより俗論派を完全に打倒し、一八六五年（慶應元）三月十七日正義派の主張は全く容れられることとなつたのである。

この内戦における正義派の勝利は、まさしく奇兵隊および諸隊の力にあつた。奇兵隊は一八六三年（文久三）七月六日の高杉晋作によつて有志之者相聚候儀に付、藩士陪臣輕卒選ばす同様相交り、當分力量互蓄ひ、堅

固之隊相調へることしかるべし。可東行先  
生遺文云しとして編成されたるものであり、諸  
隊は、六三・四年における對幕府・對外艦の  
危機に際して、豪農層が中心になつて編成し  
たものであつた。こゝろは、決して革命的民  
兵たるの資格をもつたものではないが、古い  
封建家臣團の軍事組織とは質的に異つた軍隊  
であり、とくに諸隊においては、隊員たちが  
俗論派や幕府軍に對して示した盛んな意氣か  
ら、いかに廣汎な民衆のエネルギーを吸収し



ているかはあきらかである。さらにこれらの  
軍隊が、自らの規律を厳正にして領内民衆と  
の結合を深めようとしたことは、封建的支配  
者の民衆に利用し、の具體化としてのこれらの  
軍隊が、幕府・諸藩にみられる上から編成さ  
れた幕藩權力擁護のための農兵と本質的に異  
なっていることを示している。  
ともあれ正義派は、このような民衆のエン  
ゲージを利用することによって、その勝利を  
うるこゝとができたのである。こうして長州藩

は、一八六五年（慶應元）以降正義派をリ  
ドした高杉晋作・木戸孝允・伊藤俊輔（博文）  
・井上聞多（馨）によつて主導されるに至り  
開國進取を藩是とし、外に向つては閩藩の静  
穩を示し、内においては藩内一致して国力の  
充實をはかるとの武備恭順の方針を定めるに  
至つたのである。こうして四月に入つて火繩  
銃・甲冑等の古い武器を全て賣拂ひ新式の施  
條銃をイギリス商人を通じて購入し、さうい  
銃隊を編成するなどと徹底した軍制改革を行つ



た。これと併行して高杉等は下関開港を唱之  
るに至り、同年十月高杉・木戸は下関の越荷  
方頭人をおね、藩外商業の擴大を企圖し、さ  
らに種々の藩営工場の建設を計畫した。長州  
藩においても、上かろのブルジョワ化・重商  
主義政策による絶對主義への傾向がいよいよ  
よ明確になつてゐたのである。そしてこの  
間に比較的自由に組織されてゐた諸隊が、藩  
権力の下に正規の常備軍として強力な統制と  
訓練をうけるに至つた。このことは、民衆の

エネルギーを廣汎に吸収し之を長州藩においても富國強兵策が文字通り封建的支配者の立場から推進されるものであることをあきらかに示している。

以上のようば諸藩の方向は、幕府においても少くとも表面的には同じ形で進行した。しかもそれはフランスの援助に頼る形で行われたのである。フランス公使ロツニコの提案による生絲による貢納とそのフランスへの直輸出・日佛兩國間の交易組合の計畫等が進



めら小、外國貿易の幕府獨占が企圖され、  
他方洋式軍備の整備、武器工場等の建設も進  
められ、將軍を頂點とする統一政權確立を指  
向した。そしてこのようは幕府とフランスと  
の接近は、それ以前から進められつつあった  
西南雄藩とイギリスとの關係を一層密接なも  
のとしていった。

以上のようは幕府および諸藩の動向は、ま  
さしく絶對主義政權確立の主導權争いであっ  
たのである。一八六四年へ元治元一の第一回

征長戦は、まだ専横派にたいする公武合體派の彈壓という性格をもつていたが、このあと薩摩・長州藩が、先きのむかような藩體制を整備していく道程において倒幕の方向を明確にしてくるのである。そして土佐勤王黨出身の坂本龍馬および中岡慎太郎の周施によって薩・長兩藩の提携が深められ、ついには一八六六年八月に一月二十一日兩藩の間に倒幕の密約が成立するに至つたのである。この薩長同盟は、もっとも先進的に倒幕の



ための富國強兵策を推進しつつあった薩・長  
兩藩のきわめて軍事的な同盟であつた。その  
目的とするところは、中興の大業し（應慮  
二年七月島津父子意見書——井上清著『日本  
近世史』所收）をなし、丁「皇國興復し（薩  
長同盟盟約——『坂本龍馬』關係文書（一）を  
はかること、すなわち薩長兩藩の主導権の下  
に武力によつて天皇を中心とした政權統一を  
はかることにある。このことは同時に、新  
から全國的な農民蜂起が、封建的支配者の足

下をすくやんとする革命的な情勢に對する封建的支配者の反革命であつた。この反革命は封建的支配者間の内亂を中止し權力を統一して新しい支配體制を作りあげることにおいてのみ可能であつたのである。すでに民衆は「貧窮の者國內に一人もこゝろ無き様に致事」米並に諸色盡く下直に致事……右の通り改革致し日本國をば世界第一の善國と致度し一慶應二年八月江戸小石川における捨訴——井上清著『日本近代史』所收——と主張しているよ



うに、近代的な愛國心を表明しはじめていた。  
こうした事態に對する封建的支配者の動搖こ  
ろが、反革命を求めさせた究極的な原因であ  
った。しかしこの反革命は、「萬一戦負色に  
こゝれあり候とも一年や半年に決而潰滅致候と  
申事はこれ無き事」へ薩長同盟における木戸  
孝元の意見——「坂本龍馬關係文書」——と  
の幕府に對する満々たる自信に裏づけられた  
薩長同盟によつてのみなしたげうることである。  
そしてこの自信は、尊攘運動以來の豪農・商

層との同盟、長州藩指導者が内戦を通じて吸  
収した民衆のエネルギーを基礎とした上に富  
国强兵策を推進したところ、成立したもので  
あることを忘れてはならない。幕府と薩長  
同盟との相違はまさしくここにあるのであ  
る。こうして尊攘運動は、倒幕へと新しく飛  
躍していったのである。

この尊攘運動から倒幕運動への飛躍は、そ  
の運動形態においてつぎの二つの轉回による  
ものである。第一に、一人に五百人や



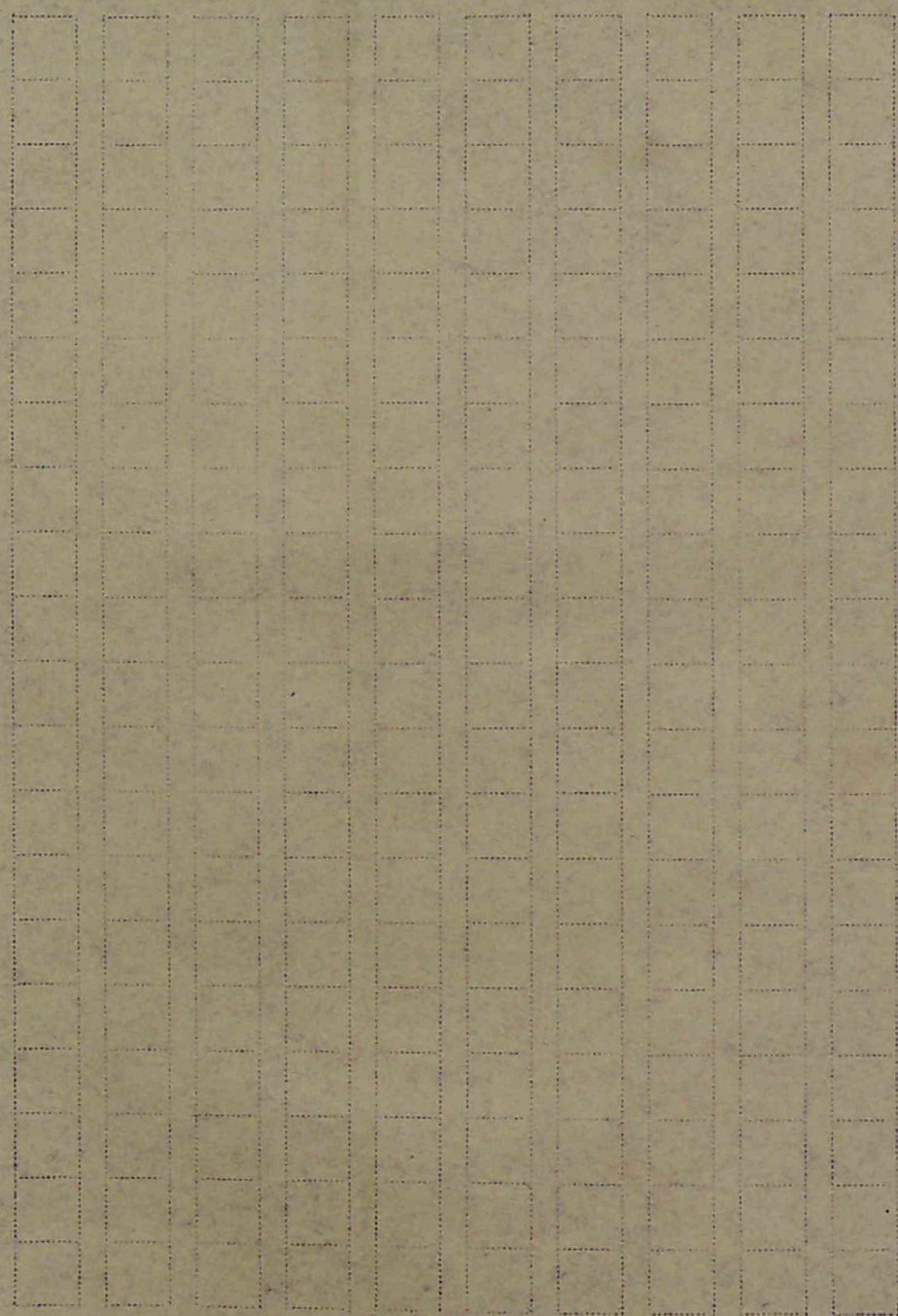
七百人の人を引て天下のあをするより、二十  
四萬石へ土佐藩の總石高しを引て天下國家の  
御為致すか甚よろしくしへ姉乙女への書状――  
「坂本龍馬關係文書」(一)との坂本龍馬の  
言葉に象徴的に示されてゐる意識である。す  
なわち尊攘運動が、藩主のりこえて急進的な  
行動に走りぬのはい運動になつたのに對して  
倒幕運動は、藩の割據を重視し藩體制全體を  
倒幕に向けるものであつた。このことはまた  
尊攘運動がもつた藩權力ともたつたかう性格――

——即自的に内包され反封建性——を失うこと  
とてもあつたのである。第二に、中岡慎太郎  
の「大阪邊の豪商と結び洋商公會の法に習ひ  
商會を結び、下關大阪長崎上海香港等へその  
局内の者をだしたに國財を養へ」への建言  
——『維新士佐勤王史』——う必要があるとの  
主張である。すなわち軍機運動においてほき  
めめて抑商主義的であつたが、この倒幕運動  
においては一、特權的大商業資本との結合、こ  
とほをかえれば金融大ブルジョワジーをその



權力連盤に含みこむことによつて絶対主義政  
權の形成を企圖する方向に、目標を設定して  
いるのである。

ともあれこのようは運動形態の轉回および  
運動目標の轉換によつて、無秩序の打破の  
秩序をあらはし……形成途上の國民をあらは  
し幻想をあらはする『王權』を中心にある  
力の統一を、具體的に推進すること加可能と  
したものである。



1218



あ

と

か

き

本稿は、た記の諸論稿に於ける一九五六年以降の主として土佐藩を中心にした研究を、核として、幕末維新期の政治過程を構造的に分析することを企図したものである。従来の維新史研究が、主として中央政局の問題を中心に分析が進められてきたのであつたが、本稿においては、とりわけ側幕諸藩の例かうその分析を進めた。このことは、この維新期に

あつる諸階級のお互の、中央政局の次元にあ  
ける場合よりも、藩幕位の次元の場合の方が  
より鋭く現われるからであり、さうに明治維  
新の特色の一つである幕藩体制の梅造的改革  
の側面がより明確に現えらるからであつた。  
しかしこうした観点は、ともすれば問題を  
一藩幕位に局限する危険をもち、明治維新の  
重要な特色である国家的統一の問題を具體的  
に把握し得ない危険がでてくる。茲に分析対象  
を土佐藩に限定したこゝによつて、こ



うした危険をかなり逃かしたと考えてゐる。  
なふ、補論曰、尊王と攘夷とは、概説的な叙  
述であるが、私にとつては、本稿成立の出發  
的~~の~~ような後勅をもつてゐるので、~~収載~~した  
訳である。~~載~~

明治維新の政治的課題

日本史研究 四二四号

藩政改革と明治維新（高知藩）

日本社会経済史学 四二二卷五・六号

天保改革論の再検討——工化藩を中心として——

日本史研究 四三 一三〇

工化藩における安政改革とその反映

日本史学研究 二〇 五号

工化藩における諸幕運動の展開

日本史 林 四〇 卷五号

工化藩以降幕末政治史研究の概観

工化藩・安政期の政局

側幕運動

日本史学会編 日本証維新史研究講座 四三



尊王と攘夷

(神論)

日本史研究会  
在史学研究会

編

四

日本在史講座  
上巻

(四)

